



東 京 圖 書 館

一	二	二	九		
〇	四	一	函	蜀	類
冊	号	架			

伯克爾  
著

# 英國文明史

土居光華  
全譯

第三卷

土居光華  
萱生奉三

全譯

第壹編  
第貳編

HISTORY  
OF  
CIVILIZATION  
IN  
ENGLAND.

BY  
HENRY THOMAS BUCKLE.

伯克爾氏著

英國文明史

一千八百七十二年倫敦出版

明治十二年三月出版

寶文閣藏版

翻譯英國文明史叙

余少小ヨリ好テ諸史ヲ歴涉シ、左氏ノ春秋傳、太史公ノ  
史記、涑水ノ通鑑、紫陽ノ綱目、其ノ外、三國史、五代史等ヲ  
誦シ、凡漢土ノ歴史ハ、大略通熟スルヲ以テ、我邦ノ歴史  
ニ入り、先ツ水戸ノ大日本史ヲ讀ミ、次テ竹山ノ逸史、山  
陽ノ外史ヲ閱了スルニ及ンテ、卷ヲ掩テ其ノ數年來、日  
夜孜々勉勵シテ誦讀シ來ル所ノ者ヲ商量スルニ、其ノ  
文章ハ皆盡ク雅健明快、其ノ狀述モ亦盡ク活潑飛動、能  
ク讀者ノ心目ヲ樂マシメサルニ非スト、雖モ、夏ニ之カ  
爲ノニ何等ノ利益ヲ我身ニ附與セラレ、亦之ヲ以テ後  
來何等ノ作用ニ充ツヘキヲ覺ハス、畢竟戲場ニ於テ俳

土居光華  
堂生奉三

全譯

第壹編  
第貳編

HISTORY  
OF  
CIVILIZATION  
IN  
ENGLAND.

BY  
HENRY THOMAS BUCKLE.

英國文明史

伯克爾氏著

一千八百七十二年倫敦出版

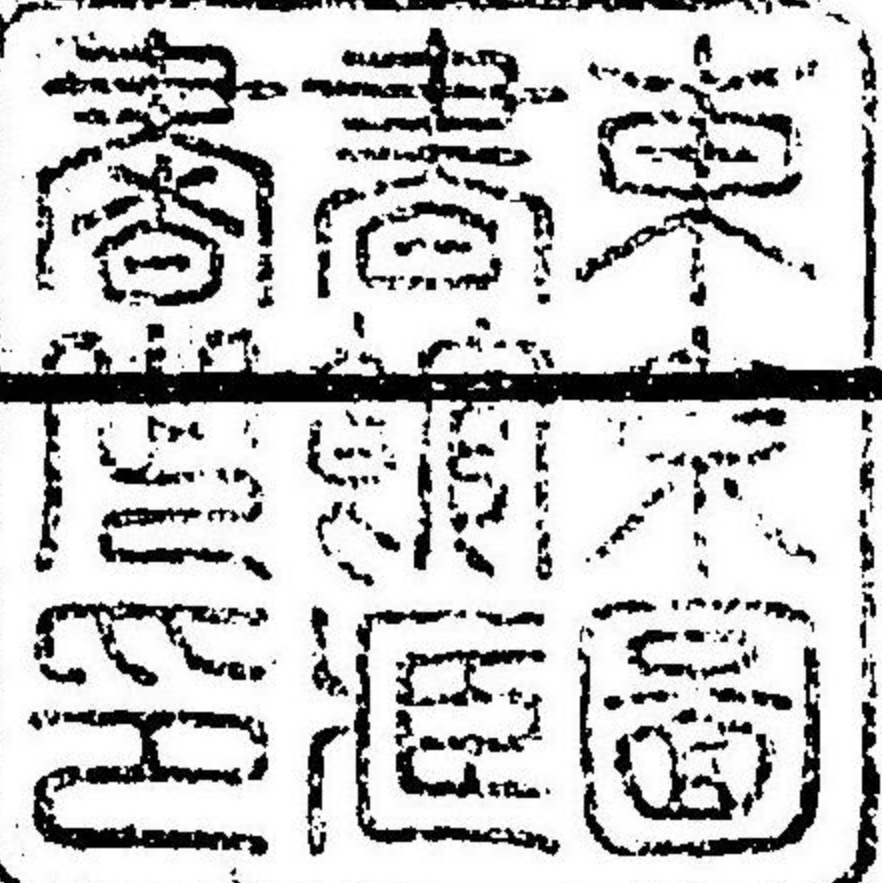
明治十二年三月出版

寶文閣藏版



翻譯英國文明史叙

余少小ヨリ好テ諸史ヲ歴涉シ、左氏ノ春秋傳、太史公ノ  
史記、涑水ノ通鑑、紫陽ノ綱目、其ノ外、三國史、五代史等ヲ  
誦シ、凡漢土ノ歴史ハ、大略通熟スルヲ以テ、我邦ノ歴史  
ニ入り、先ツ水戸ノ大日本史ヲ讀ミ、次テ竹山ノ逸史、山  
陽ノ外史ヲ閱了スルニ及ンテ、卷ヲ掩テ其ノ數年來、日  
夜孜々勉勵シテ誦讀シ來ル所ノ者ヲ商量スルニ、其ノ  
文章ハ皆盡ク雅健明快、其ノ狀述モ亦盡ク活潑飛動、能  
ク讀者ノ心目ヲ樂マシメサルニ非スト、雖モ、夏ニ之カ  
爲ノニ何等ノ利益ヲ我身ニ附與セラレ、亦之ヲ以テ後  
來何等ノ作用ニ充ツヘキヲ覺ハス、畢竟戲場ニ於テ俳



優子弟カ奇技ヲ奏シ、觀客兒女ノ喝采ヲ博スルニ異ナ  
ラス、且其ノ主トシテ記載スル所ノ項羽高祖ノ鴻門會  
謙信信玄ガ川中島ノ戰等ノ如キハ、其ノ勝敗得失、其ノ  
一國一家、一人一箇ノ上ニ就テハ、大關係ナキニシモ非  
スト雖モ、均シク今日社會ノ痛痒、文明ノ汚隆ニ影響ヲ  
生セサル事ナレバ、是亦角抵場ニ於テ東西力士カ其ノ  
雌雄ヲ決シ、博徒カ競馬埒ニ於テ其ノ家産妻兒ヲ賭シ  
テ、其ノ勝負ヲ爭フカ如シ、余ハ此ノ如ク、和漢今古ノ歷  
史ノ無用無益ナルヲ覺知シ、之ヲ讀ムヲ屑トセス、因  
テ西洋諸國ノ歴史ヲ涉獵セント欲ス、其ノ意以爲ラク、  
西洋ノ史ハ、必ス和漢史乘ノ如クナラサルヘシト、ウキル

史乘ヲ學フニ及ンテ、何ン圖ラン、是等西洋名家ノ歴史

ソングードリッチ、ホワイト、テローロルタイトレル諸氏ノ  
史乘ヲ學フニ及ンテ、何ン圖ラン、是等西洋名家ノ歴史  
ノ如キモ、同一和溼瀕カ英ニ叛セシ時此ノ如シ、那破倫  
カ魯ヲ討セシ時此ノ如シ、納爾森究林登カ此ノ如キハ  
時ニ當リ、此ノ如シト、同一言ヲ載シ事ヲ記シタル所ノ  
記録ニ外ナラスシテ、曾テ和漢歴史ニ異ナル所ヲ見サ  
レハ、余ハ大ニ失望ノ嘆ヲ發シタリ、其ノ後世別ニ義賊  
伯克爾氏ノ文明史ナル者ノ在リアルヲ傳聞シ、之ヲ  
學ハント欲シ、遂ニ其ノ書ヲ購求シ、友人某ト之ヲ一覽  
スルニ、二書共ニ高尚絶倫、其ノ言論皆盡ク人ノ意表ニ  
出テ、人ノ心目ヲ開洞セサルナシ、之ヲ前者ノ諸史ニ比

スレハ、殆ント暗夜ヲ度リテ白晝ニ入ル如シ、其ノ快實ニ言フヘカラサル者アリ、就中伯克爾先生ノ書、奇拔雄偉、而メ其ノ今古史家ノ材識ニ乏シキヲ論スル處、最モ余カ意ニ適合セリ、因テ友人ト計リ此書ヲ譯述セシムヲ企テタリ、其ノ後事故アリ延遷數歲、此間漸ク其ノ順序法便ヲ得ルニ及ヘリ、古人云ク己カ欲スル所、宜ク之ヲ人ニ施スヘシト、余願クハ江湖諸君ト此慶幸ヲ共ニシ、讀史ノ眼目ヲ洗滌シ、千古ノ陋習ヲ破壊シ、左國史漢ノ外ニ於テ自カラ歴史ノ新體裁ヲ創建シ、和漢ノ史乘ヲ改革スヘシ、希クハ今日文明社會ノ操觚家ニ耻チザルナリ、是レ余カ淺薄ヲ顧ミズ、此ノ大家高尚ノ書ヲ譯

述スル所以ナリ、然ルニ余輩書生、且衣奔食走ノ間、匆々筆ヲ執リ修綴スルヲ以テ行文亦自カラ我意ニ適セサル者多シ、亦讀者ノ之ヲ拋棄シテ、之ヲ讀マサルニ了ルヲ恐ル、故ニ今是等君子ノ爲メニ、茲ニ一言セント欲スル者アリ、諸君幸ニ余ヲ以テ非ヲ文リ、拙ヲ掩フモノトナス勿レ、余、今世翻譯書ヲ讀ム者ヲ觀ルニ、大抵先ツ其ノ腦中ニ是レ片假名交リノ文ナリ、翻譯書ナリ、讀ミ易スカルヘシ、解シ易スカルヘシト想像シ、是レハ大家ノ文ナリ、讀ミ難カルヘシ、是レハ高尚ノ書ナリ、解シ難カルヘシト思考スル者ナシ、故ニ開卷ニ兩業、其ノ腦髓ヲ勞スル者アレハ、直ニ罪ヲ翻譯者ニ歸シ、其ノ自家勉勵

ノ不足ヲ省ミル者ナシ、試ミ思ヘ、漢學者ノ古文ヲ研究スルハ、一日一語、一月一章、思テ得サレハ措カサルニ非スヤ、而シテ吾人ノ如キモ、其ノ漢書ヲ把リ、字義ヲ穿鑿スルニ當テハ、假令其ノ梗塞通シ難キ者ニ値フト雖モ、皆甘シテ之カ艱難ヲ受ケ、之カ困苦ヲ嘗ムルニ非スヤ、又西洋原書ヲ讀ムニ至リテハ、一字ノ考索、一日ノ勞ヲ憚ラサル者、其ノ常トスル所ニアラスヤ、然ルニ只翻譯書ノミ、容易ニ之ヲ解セント欲シ、解シ得サレハ、忽チ之ヲ其ノ譯者ノ罪ニ歸ス、豈ニ思ハサル甚レキナラスヤ、今此ノ文明史ノ如キハ、譯者其ノ罪ヲ辭スヘカラサル者多シト雖モ、高尚大家ノ大著作、且其ノ論述、廣ク世界萬

スヤノミ  
キリノミ  
キリノミ

國ノ事情ニ干渉スルヲ以テ、讀者往々迷津ノ嘆ナキヲ保スル能ハス、故ニ余ハ此書ヲ讀ム者ノ豫メ西洋諸國ノ歴史ヲ通覽シ、其ノ腦中先ツ一科ノ歴史學ヲ貯藏セシテ、希望スルナリ、何トナレハ、今讀者カ何如ニ心力ヲ用キスト雖モ、譯者カ何如ニ拙劣ナリト雖モ、事理カ何如ニ深奥ナリト雖モ、試ニ西洋脩身書ヲ把レハ、讀者直ニ其ノ大要ヲ領得スヘシ、是レ佗ナシ、吾人腦中ニ脩身書アレハナリ、蓋脩身書ノ主意ハ、和漢西洋大略同一單純ナル者ニシテ、父母ヲ愛敬スベシ、長者ヲ尊敬スベシ、汝ノ敵ヲ寬恕スヘシ、情慾ヲ制スヘシ、數頂ニ過キスト雖モ、若シ矇昧蕃野ノ人ヲ使テ此ノ道德ノ理ヲ聞

カシメハ、亦大ニ解シ得サル者多カルヘシ、之ニ反シテ  
吾人ハ平生儒佛二教ノ中ニ生育セラレタルヲ以テ、脩  
身書ノ如キハ、一點思議スル所ナキ者ニ非スヤ、然レハ  
是等西洋大家ノ書、高尚ノ論ト雖モ、吾人能ク其ノ想像  
ヲ高クシ、其ノ聞見ヲ廣クシ、目讀テ心解シ、此葉未ダ了  
ラサルニ、腦中己ニ後葉大意ノ如何ヲ擇然悟了スル如  
キ者アレハ、豈ニ文章ノ巧拙ヲ論シ、譯者ノ拙劣ヲ憾ミ  
ンヤ、天際ノ雪ヲ認テ、忽チ其ノ富士ヲ知リ、空中ノ烟ヲ  
見テ、忽チ其ノ淺間ヲ判ス、夫レ天際ノ雪ハ、固ヨリ富士  
ノ章ニ非ス、空中ノ烟ハ、亦淺間ノ標ニ非ス、然リ而シ、此  
山海兩道ノ旅客ハ、皆車夫馬丁ノ指點ヲ煩サス、其ノ一

縷ノ烟ト、八粟ノ雪ヲ以テ、富士淺間ヲ識別スル者ハ、亦  
其ノ腦中富士淺間アレハナリ、明治十二年二月十五日、  
東京淺草橋北望嶽樓上ニ於テ土居光華識

伯克爾先生小傳

伯克爾姓顯理的馬斯名英國近世ノ歴史家ニシテ、倫敦

賈人ノ子ナリ、千八百二十二年文政五年十一月二十四日ヲ

以テ、賢士州中ノ李ニ生ル、幼ニシテ銳敏、人後ニ立ラ屑

トセス、年甫テ十四、數學優等ヲ以テ其ノ校ノ賞ヲ得タ

リ、父之ヲ喜ヒ亦物ヲ與ヘテ之ヲ賞セント欲シ、其ノ好

ム所ヲ問フ、時ニ先生既ニ校ノ教授ヲ喜ヒス、家居獨學

大ニ諸書ヲ涉獵セントス、乃チ父ニ請フテ曰ク、兒復物

ヲ得ルヲ望マズ、家君若シ兒ニ賜フ所ヲラント欲セハ、

願クハ兒ニ間日月ヲ賜ヒ、兒ヲ使テ校ヲ辭シ家ニ居リ

博ク書ヲ讀ムトヲ得セシメヨト、父其ノ請ヲ異トシ乃



其之ヲ許シ、家居其為ス所ヲ恣ニセシム、父固ヨリ其  
 ノ材器ヲ識ル、故ニ責ムルニ家事ヲ以テセズ、是ヲ以テ  
 先生閑居數年、大ニ其ノ心カヲ學業ニ委ヌルヲ得タリ、  
 家巨商ニ非スト、雖亦頗ル富優ナリ、父ノ没ニ及テ遺產  
 太多シ、先生悉ク舉テ之ヲ買書ノ資ニ充テ、復之ヲ餘事  
 ニ用キス、凡ソ百科ノ書ヨリ、奇僻ノ雜書、新聞紙等ニ至  
 ル迄、購求シテ具備セサルナシ、家中殆ント書冊ノ城郭  
 ノ如ク、後遂ニ別ニ書庫ヲ修築スルニ至リ、壯ナルニ  
 及テ、深ク人事開進ノ理ニ見ル所アリ、大ニ其ノ志ヲ興  
 シ、大著作ヲ成シ、史學ヲ以テ新ニ一科ノ學科ヲ創立セ  
 シト欲ク、是ヨリ益世俗ノ塵事ヲ謝絶シ、一日十時間ヲ

以テ、著書ノ課程トシ、刻苦二十四年、遂ニ文明史、第二卷  
 ヲ編述セリ、蓋其ノ意、先ツ總論ヨリ筆ヲ起シ、次テ本史  
 ニ入ラントスルナリ、而シテ總論纔ニ刑定シ、二卷漸ク其  
 稿ヲ脱セントスルニ際シ、不幸病ニ罹リ、筆ヲ執ル能ハ  
 ス、因テ漫遊東方ニ去リ以テ病ヲ養ハント欲ス、而シテ病  
 愈重ク、遂ニ西細利亞ノ太馬斯究斯ニ客死ス、寔ニ千八  
 百六十八年明治元年五月三十一日ニシテ、享年四十六歳ナ  
 リ、先生母ニ事ヘテ至孝、其ノ書第一卷ノ成ルヤ、喜テ自  
 カヲ禁ヘス、持テ母ノ前ニ至リ曰ク、是レ兒カ始著ノ書  
 ニシテ、此卷即チ其ノ初篇ナリ、兒今日此ノ著作ヲ成就  
 スルハ、全ク慈親善導ノ致ス所、兒敢テ其ノ功ヲ有セス、

以テ膝下ニ呈スト、後遂ニ其ノ語ヲ卷首ニ題シテ、之ヲ發行セリ、其ノ壯歲病ヲ得、永ク天壽ヲ保チ得サルハ、職トシテ平居學ニ耽リ、攝養ヲ欠クニ坐スト雖モ、其ノ母ノ喪ニ遭フニ及ンテ、哀毀已ムナク、之カ因ヲナス者多シト云フ先生容貌朴實野人ノ如ク、言語蹇澁大ニ其ノ文章ノ活潑ナルニ似ス、然ルニ百科ノ書ニ論ナク、新聞雜書ノ瑣事ニ至ル迄、大抵暗記シテ一ヲ遺サス、故ニ人一ヒ先生ニ謁シ、其ノ談ヲ聽ク者ハ、皆其ノ談博ニ驚駭シ、其ノ細密ヲ感嘆セサルナシ、嗚呼先生ノ如キハ實ニ千古ノ英傑、史學ノ為メニ希普列爾、牛董ノ再生セル者ト云フヘキカ

明治十二年一月 土居光華識

凡例七則

一此書第一卷ハ、西曆千八百五十七年安政四年以テ發行セラレ、其ノ後四年ヲ經テ、第二卷世ニ出ツ、尋テ幾クナクシテ、先生病ニ罹リ、後又七年ニシテ没ス、今余カ茲ニ譯スル所ノ原本ハ、千八百七十一年明治四年ノ印刷ニ係リ、舊版二卷ヲ改メ分テ三卷トナス所ノ者ナリ、但逐次ノ譯出豫メ其ノ卷冊ノ數ヲ定メ難ケレハ、其ノ篇次數目ノ如キハ、每次其ノ卷首ニ掲ケ以テ讀者ノ照考ニ便セントス、

一原本引用書目ヲ載スル者、九百餘種、而メ其ノ採擇スル處ハ、葉底必ス其ノ何書何卷何葉ヨリ出ツルヲ記

シ、頗ル周密ヲ極メタリ、其ノ餘自註亦甚具備セリト  
雖モ、一々之ヲ譯セハ、只自己其ノ煩雜ニ堪ヘサルノ  
ミナラス、亦讀者ノ屢足ニ苦シマンテ恐レ、今盡ク  
之ヲ省略ス、

一 本文ハ、敢テ妄リニ私見ヲ以テ之ヲ改竄増減セス、必  
ス原意ニ切當ナランテ期ス、故ニ布字重複、行文迂  
回ノ為ニ譏ヲ取ル如キハ、余カ固ヨリ辭セサル所ナ  
リ、

一 書中圈點ヲ附シ、欄上且其ノ略ヲ掲ル者ハ、字眼或ハ  
主意ヲ示シ、批點ヲ施ス者ハ、緊要又ハ事理ノ佳境ヲ  
示シ、横畫ヲ引ク者ハ、小段落、即チ言論ノ枝節ヲ示ス、

讀者宜ク注意アルベシ、

一 書中篇首ニ掲ル者ハ、全一篇ノ本題ニシテ、行間ニ以  
上云々ト記スル者ハ、大段落ノ大主意ナリ、

一 地名、人名、物名、及尺度量衡等ハ、一般譯書ノ例ニ倣ヒ  
新ニ之カ體裁ヲ立テス、

一 書中譯字ノ穩當ナラス、原意ノ透徹セサル者、鈔トセ  
ス、然ルニ今逐一研究穿鑿、其ノ美善ヲ盡シ難キ者ア  
レハ、姑ク他日ノ改正ニ讓リ、斷然之ヲ刊行ス、讀者幸  
ニ深ク相咎ル勿レ、

明治十二年第一月

土居光華識

伯克爾文明史總論目錄

第一篇

歴史ヲ追究シ、人事ノ次序ヲ證明センカ為ニ、之カ材料トナスヘキ者ヲ論ス、  
人事ハ心理上ト、物理上ノ法則ニ由テ制セラレサル者ナシ、故ニ人事ヲ推究スル者ハ、是ノ兩法ヲ講明セサル可カラス、而メ之ヲ為スニハ、夫ノ自然ノ景狀ニ就テ、之ヲ探討スルノ外、更ニ其ノ憑據ス可キ者ナキヲ論ス、

○修史ノ材料ヲ論ス、二節

○古今修史家ノ學識ナキヲ論ス、五節

- 本書編述ノ目的ヲ論ス、一節
- 史家ノ才識乏シク、人事ニ法則アルノ證ヲ發見スル能ハサルヲ論ス、二節
- 心思自由ト、命數預定ノ本原ヲ論ス、一節
- 命數預定ノ說ハ神學ニ出テ、心思自由ノ說ハ、心理學ヨリ來ルヲ論ス、一節
- 人ノ行為ハ、心思外物ノ兩間ニ於テ、其ノ顯レ來ル所ノ諸般ノ前事ニ起原スルヲ論ス、二節
- 歴史ハ心思事物ノ變化ノ掲載ニ成ルヲ論ス、二節
- 統計學ヲ以テ、人ノ行為中、故殺及ヒ其ノ他ノ罪

- 犯ニ、悉ク一定ノ法則アルヲ論ス、七節
- 自殺ヲ以テ、前論ヲ證シ、重テ統計學ノ確信スヘキヲ論ス、三節
- 物理學ヲ引テ、人事大法ニ、時アツテ小違亂アルヲ論ス、一節
- 婚姻及過誤出簡人ノ數ヲ舉テ、前證ヲ補ヒ、併ニ後來事物ノ判スヘキヲ論ス、二節
- 統計學及ヒ理學ノ修史ニ重要ナルト、方今史家ノ責任ヲ論ス、二節

第二篇

邦國ノ編制人民ノ性質造化ノ法ニ因テ支配セラレタル景況ヲ論ス

○人間、氣候、食物、地質、及ヒ天造ノ光景ノ四者ニ因テ、感觸引誘ヲ受クルヲ論ス、三節

○財貨ノ増殖ニ於テ、氣候、食物、地質三者ノ功用ヲ論ス

○財貨ノ分布ニ於テ、氣候、食物、地質三者ノ功用ヲ論ス、十三節

○愛倫ヲ以テ例トシ、前論ヲ證ス、二節

○印度ヲ以テ例トシ、前論ヲ證ス、十三節

○埃及ヲ以テ例トス、八節

○中央亞米利加ヲ以テ例トス、一節

○墨西哥及白露ヲ例トシ、并ニ巴拉西爾ニ造化法制ノ感觸ヲ與フルヲ論ス、十七節

○天然ノ光景、人ノ心思上ニ感觸ヲ與フルヲ論ス、二節

○地方ノ模様ニ由リ、造化人力互ニ相優劣アルヲ論ス、一節

○身外ノ現像ノ最モ強大ナル地ハ、想像力必ス理會カヨリ感ナル所以ト、古代開化ノ此レニ因テ起リレ所以ヲ論ス、一節

○地震火山等、總テ危險ノ事ハ、想像ヲ煽動スルヲ

論ス、三節

○健康保ヲ難キ地ハ、即チ想像盛ナル地ナルヲ論ス、三節

○熱帶諸洲ノ開化ハ、想像ニ因リテ感動セラレ、歐洲ノ開化ハ、理會力ニ因リテ、運轉セラレタルヲ論ス、二節

○印度ト希臘トヲ比較シテ、之ヲ詳明ス、十四節

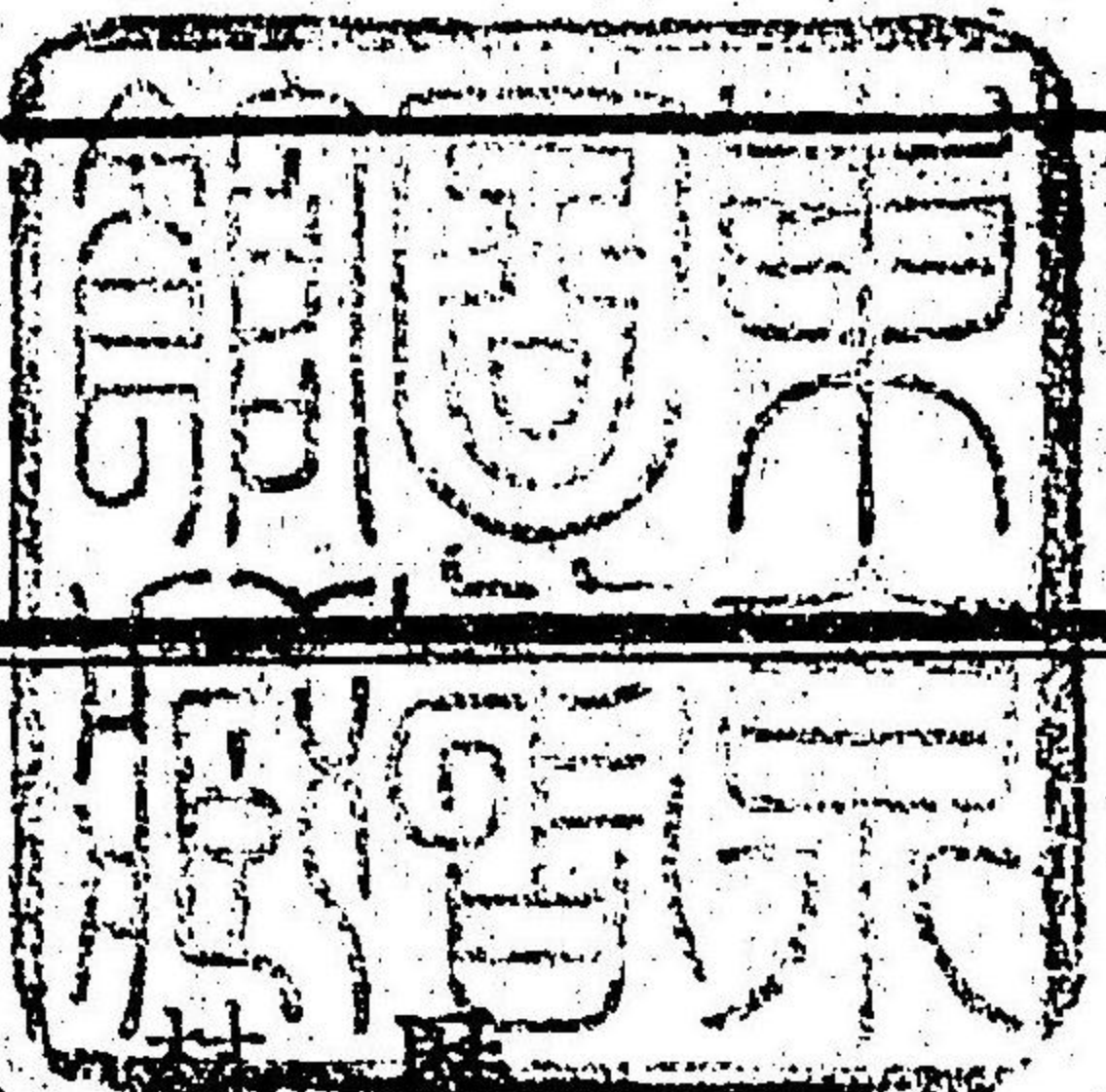
○中央亞米利加ヲ舉ゲテ、之ヲ論ヲ補助ス、一節

伯克爾英國文明史第一編

土居光華

菅生奉三

同譯



歴史ヲ追究シ、人事ノ次序ヲ証明センカ為ニ、之カ材料トナスヘキ者ヲ論ス、

人事ハ、心理上ト物理上ノ法則ニ由テ制セラレサル者ナシ、故ニ人事ヲ推究スル者ハ、是ノ兩法ヲ講明セサル可カラス、而シテ之ヲ為スニハ、夫ノ自然ノ景狀ニ就テ、之ヲ探討スルノ外、更ニ其ノ憑據ス可キ者ナキヲ論ス、

歷史ノ通論

夫レ人世ノ諸學科中ニ於テ、其部類最饒多ニシテ、且能ク人意ニ適合スル者ハ、歷史ナリ、而ハ其ハ修史家ノ功績ハ、殆ト其ハ勤勉ハ、比例ニシテ、其ハ探究愈密ナレハ、其ハ得ル所亦愈詳ナリト、是レ一般世上ノ通論ナリ、斯ノ如ク、歷史ノ大ニ世上ニ信重セラル、景狀ハ、其ノ之ヲ誦讀スル者ノ多キト、其ノ諸般教育上ニ用ウル所ノ廣キヲ以テ觀ルヘキナリ、而メ此ノ信重セラル、所以ハ、又自ラ其ノ謂ナキニ非ルナリ、其ノ之ヲ編纂セン為ニ、古今諸家蒐集セラレタル所ノ材料ハ、豊富詳密ニシテ、且網羅セサル所ナシト云フベシ、今試ニ其ノ例ヲ舉レハ、歐洲ノ諸大國ハ、論ナク、其他大抵ノ諸大國ノ

歷史ノ信重セラル、所以  
諸家蒐集ノ材料

政事及兵事

憲法及法教

學術文學工藝

上代ノ事實

政事及兵事上ノ記錄ハ、諸家能ク其ノ穿鑿ヲ盡シ、精密ナル注意ヲ以テ、之ヲ便利ナル體裁ニ編輯シ、而メ其考証引據亦略依信スルニ足レリ、又憲法及法教ノ歷史ニ至リテモ、其ノ搜索盡ク詳密ナリト云フヘシ、稍其ノ歩ヲ讓ルト雖、其ハ學術、文學、工藝、及世間至要ノ發明ヨリ、人民風俗生計ノ景況ニ至ル迄、之カ進步ノ事跡ヲ討究スルニ於テ、皆史家ノ勞苦ヲ經サルモノナシ、且上代ノ事實ヲ知り、吾人ノ知識ヲ增益セシカ為メニ、古昔ノ都府ヲ探究シ、其ノ位置舊址ヲ檢出シ、古代ノ貨幣ヲ掘索シ、其ノ記號ヲ推讀シ、或ハ碑碣題署ヲ摸寫シ、或ハ古文字ヲ恢復シ、或ハ古昔埃及ノ象形文ヲ解詁シ、或ハ既ニ久



語學家

經濟學

統計學

地形學

シク廢絶シタル國語ヲ編立再興スル等、古物、古蹟、一ト  
 シテ穿鑿セラレサルモノナシ、又語學家ノ言語ノ變遷  
 ヲ支配スル所ノ數條ノ法則ヲ發明セシ、其ノ力ニ依テ、  
 荒邈ナル世代ノ事蹟、即人民離散ノ景狀ヲモ知得スル  
 ニ至レリ、又經濟學ノ關ケシヨ、大ニ社會紛擾ノ大源  
 因ナル財帛分布ノ不平均ニ就テ發明スル所アリ、又統  
 計學盛シタルニ隨テ、人ノ形體ニ關スル事ノミナラス、  
 罪犯ノ數、及其ノ各種ニ就テ、多少ノ比例、又廣ク年齡男  
 女教育等ノ為ニ、其ノ罪犯上ニ感及スル所、人ノ心術  
 ニ關スル事ヲモ知得スルニ至レリ、地形學モ亦是等ノ  
 進歩ト相讓ラス、氣候ノ現象ヲ檢査シ、山嶽ノ高低ノ測

化學

諸學科

死亡婚姻生  
產營業

量シ、川河ノ廣狹ヲ測リ、其ノ源委ヲ究メ、土地自然ノ生  
 產物ヲ探究シ、而シテ其ノ隱微ナル性質ヲ發顯シ、又各種  
 食物ノ如キハ、化學ニ據テ、悉ク之ヲ分析シ、其ノ之ヲ組  
 織セル元質ノ數ヲ計ヘ、其ノ重量ヲ秤リ、且其ノ體中ニ  
 入り、其ノ形器ト關係ノ性質ニ至ル迄、十分ニ之ヲ確定  
 スルニ及ヘリ、又其ノ同時ニ際シ、其他諸學科ニ於テモ、  
 人事上ニ就テ、苟モ吾人ノ知識ヲ擴充シ得ヘキモノハ、  
 事トシテ遺漏ナカラシメント欲シ、其ノ詳細ナル穿鑿  
 ヲ盡セリ、今日文明諸國ノ人民ニ在テハ、其死亡婚姻ノ  
 負數、生産ノ比例ヨリ、其營業ノ種類、賃錢ノ浮沈、及生計  
 ニ必用ナル物價ノ高低ニ至ル迄、盡ク吾人ノ知得スル

所トナラサルナシ凡ソ此類ハ實事ハ皆既ニ蒐集條疏  
 セラレテ吾人ハ使用ニ供セラレサル者ナク其ハ形情  
 恰モ邦國ヲ解剖セルカ如ク實ニ精密ヲ極メタリト云  
 ハハ尚茲ニ其ノ成績ノ詳ニシテ其研究ノ密ナルハ  
 少ク其等ヲ降スト雖氏其ノ浩瀚ヲ論スレハ一層之ニ  
 超過セルモノアリ即チ諸大國ノ行為形狀凡ソ地球上  
 世人ノ知ル所ニシテ旅客ノ到ル所其ノ無數ノ種族悉  
 ク其筆記ニ上リ吾人ヲ使テ其ノ開化ノ種樣事情ノ異  
 別把リテ以テ相互ニ比較スルヲ得セシムル者アリ  
 然ルニ世人尚未タ穿鑿ニ厭カス新奇ヲ探ルノ心志ハ  
 日ニ益シ月ニ長シ其ノ目的ヲ達スルノ方術モ亦隨テ

諸大國、行  
為形狀

世人未タ穿  
鑿ニ厭カス

材料ノ位價

増加シ而シテ其ノ古來經驗セル者ハ大抵皆歷然トシテ  
 存在セリ今此等ハ事ヲ列舉シテ之ヲ觀ハハ吾人ハ人  
 類進歩ハ穿鑿ヲ為スヘキ材料ハ其ハ位價已ニ貴重道  
 フヘカヲサハルモハアリテ吾人ヲ使テ稍修史ノ事業ニ  
 於テ滿意ノ思想ヲ抱カシムルニ足ハリト云フヘキ  
 以上二節ハ修史ノ材料ヲ論ス、

異論

歴史ノ不幸

然リト雖氏今此ノ貴重緊要ナル材料ニ就テ其ノ使用  
 セシ所ノ方法如何ヲ質問スルニ至ツテハ吾輩大ニ此  
 間ニ於テ之カ異論ヲナサハルヲ得ス夫レ人類ノ歴史  
 ニ於テ一種不幸ナル弊習ハ其諸部ノ穿鑿即其ノ一事  
 一業上ノ推究ハ彼ノ如ク解剖シテ其ノ精密ヲ極メタ

關係相離  
ナルモノ

推究

叙述

リト雖氏之カ關係相離レナル者ヲ推究シテ以テ之ヲ一體ニ組立セシムルヲ企圖スル者、是ナキニ在ルナリ、然テ他ノ諸學科ニ於テハ、一般推究ヲ以テ、必要的ノ事ト承認シ、事物悉ク其ノ末尾ヨリ其ノ本源ニ溯リ、之ヲ支配スル所ノ法ヲ研究スレドモ、獨リ歴史家ハ、社會ノ間ニ發現シタル事情ヲ叙述スルニ止マリ、間或ハ政事ハハ人心ハ反照ヲ假リテ活潑ニ其ノ文字ヲ綴修スレハ、其ハ本分ヲ盡セリトスル者ハ、如ク是以テ考察上ニ怠情ナル者ト、天稟不才、高尚ノ學科ヲ講究スル能ハサハ者ニ論ナク、三四年ノ間僅カ數卷ノ書ヲ看閱スレハ、則儼然タル歴史家ト稱セラル、浩大ナル歴史ヲ編述ス

天然關係ノ全體

ルヲ得而シ、其ノ著書ハ天下後世ニ依テ以テ信ヲ取ル所ノ證據トナスニ及ヘリ、此ノ如キ狹隘ナル史學ノ基本ハ、大ニ知識進歩上ニ就テ、不幸ナル成果ヲ結出シ、世ノ歴史家ハ、皆預メ諸學科ニ通シテ、以テ夫ノ天然關係ノ全體ニ於テ、其ノ要領ヲ搜索提取スル所ノ識カヲ養ハンコトヲ勉メス、只淺陋ノ境ニ安ンシテ、怡然相怪ナキニ及ヘリ、故ニ經濟學ヲ學ハサル歴史家アリ、或ハ法律學ニ暗ク、或ハ全ク宗教上ノ事情、及議論ノ變遷ヲ解セサル歴史家アリ、又統計學ヲ忽ニスル者アリ、物理ノ學ヲ惰ルモノアリ、是等ノ諸學科ハ、皆人類ノ性質氣風ヲ感動シ、又其ノ發顯スル所

ノ事情ノ大原因ナルヲ以テ、極メテ緊要ノ件々ナレトモ、尚ホ之ヲ講究スル者ナク、只間、其ノ一二科ニ涉ル者アルノミ、故ニ甲ハ獨リ此ニ精シク、乙ハ獨リ彼レニ明ラカ、一人以テ之ヲ兼并セサレハ、之ヲ對照シテ、所謂天然相互ノ説明ヨリ、以テ導引シ得ヘキ所ノ利益ハ、更ニ亡失シテ相得ルナシ、今精ク之ヲ論スレハ、世未タ必須ノ組成物、即チ歴史ノ材料ナル是等ハ諸件ヲ一史上ニ蒐集シ、真成完全ナル所ハ歴史ヲ編輯セント欲スルハ氣風アルヲ見サルナリ、

千廿百年代ノ初ヨリ、史學ノ振ハサルヲ慨嘆シ、其ノ間二三大家ノ之ヲ改良セント欲スル者出テサルニ非ス

必須ノ組成物

歴史ニ在テハ考察法ナシ

然ルニ歴史ニ在テハ他ノ諸學科ニ於テ、既ニ成功セシ如ク、試験經驗上ノ考察ノ法ヲ以テ、真確ナル一大學科ニ列スルニ足ルヘキ者ナク、又其ノ考察法ヲ以テ、徹頭徹尾、人類ノ歴史ヲ穿鑿セント企圖セシモノ、全歐文學中ニ於テ、其書僅々三四種ニ過ギス、亦以テ其ノ例ノ非常ニ稀少ナルヲ知ルヘシ、

然ルニ千五百年代以降、殊ニ近古百年間ノ歴史家ヲ見ルニ、其ノ着眼スル所漸ク廣ク、昔者全ク度外ニ置キレ所ノ事蹟ヲモ、今者採テ之ヲ其ノ著書中ニ網羅セント欲スルノ勢ヲ發生シ、是ニ由テ、始テ其ノ紀事ノ音趣ヲ一變シ、而シテ其ノ併列セル事蹟ノ集合、及ヒ其ノ對置セ

五七ノ

紀事ノ音趣一變

考察ノ氣風

ヒヤ

國民ノ性質  
命運ヲ支配

ル者ノ内ニ於テ、歐洲文學上、曾テ發見セザリシ所ノ事  
 物推究ノ意想ヲ起サシムルモノアルニ及ヘリ、此一事  
 大ニ歴史家ノ為メニ、其ノ思想ノ境界ヲ廣大ニシ、且事  
 物ノ真理ヲ推究スルニ於テ、必要的ナル性質、即考察ノ  
 氣風ヲ振起セリ。此氣風時或ハ其ノ弊害ナキニ非スト、  
 雖モ、若シ之ヲ欠カハ、古今一箇ノ學科ヲモ、經營スル  
 能ハサル所ハ者ナレハ、亦之ヲ無邊ノ利益ト云ハサル  
 ヘカラス、

然リ而ノ歴史學ノ景況ハ、往古ノ時代ニ比スレハ、稍欣  
 喜スヘキニ似タリト雖モ、其ノ實事ハ尚ホ極メテ乏ク  
 夫ノ國民ノ性質及ヒ命運ヲ支配セル所ノ法則ノ如キ

セル法則

ニ至リテハ、古今未タ一事ノ發明シタルモノアラス、是  
 ヲ以テ之ヲ論スレハ、現今歴史體裁ハ、實ニ不完全ナル  
 者ニシテ、更ニ高尚ナル考察ニ供スルニ足ラス、基本未  
 タ定ラス、法制未タ立タサル所ノ諸學科ト、尚ホ混雜紛  
 亂ノ地位ニ在リ、未タ高尚ナル學科ニ列スヘカラサル  
 ナリ、然リ而モ彼ノ變化ノ今日果シテ如何ナル利益ヲ  
 ナシ、現ニ幾許ノ事業ヲ成就セシカハ、後ノ書頁ニ於テ  
 之ヲ論セントス、

以上五節ハ、古今修史家ノ學識ナキヲ論ス、  
 歴史ノ材料ハ、彼ノ如ク富多ナリト雖モ、吾人ノ歴史ニ  
 於ケル亦是ノ淺陋ヲ免レサレハ、今余輩ノ知識ヲ使テ、

著作ニ從事  
スル所以

乃其ノ權衡ヲ保タシムント欲スルニハ從來企圖ノ陋  
 習ヲ脱シ更ニ其ノ規模ヲ大ニシ此大穿鑿ノ科即チ歷  
 史學ヲ使テ他ノ諸學科ト平衡ノ點ニ進達セシメサル  
 ヘカラス是レ便チ予カ此著述ニ從事スル所以ナリ然  
 ルニ此ハ書ニ於テ大ニ予カ平生志望ヲ成達セシム  
 固ヨリ期シ得ヘキ所ニアラス惟予ハ私カニ歴史ヲ使  
 テ彼ハ物理諸學科ニ於テ其ノ諸家考察ハ進歩セシモ  
 ハト同等ナラシムシカ或ハ否ラサルモ之ニ近カラシ  
 ムント欲スルニ在リ抑モ天然萬物ハ彼ノ如ク變化不  
 定ニシテ端倪スヘカラス者ト雖且逐一之ヲ推究條  
 疏シテ皆一定不易ノ法則ニ隨フテ證明シ得タルハ

天然萬物

人事

便チ有力諸家殊ニ堅忍不拔ノ徒能ク其ノ法則ヲ發明  
 セント期シ天地事物ノ形情ヲ穿鑿シタルニ由ルナリ  
 然ハ則人事ノ變化何如ニ定限ナレト雖且果テ能ク是  
 ノ如キノ勉強ヲ以テ是ノ如キノ穿鑿ヲナセハ豈同一  
 ノ成功ヲ為シ得ヘカラスヤ況ンヤ歴史ノ事蹟ハ  
 條疏推究スヘカラスト明言スル者ト雖且只此問題ニ  
 至テハ其ノ為スヘキヲ許ルスオヤ又況ンヤ近古二百  
 年間ノ沿革事情ヲ通覽スルモ開化ノ進步ハ愈吾人ニ  
 萬物皆法則順序アルトヲ証シ愈吾人信用ヲ鞏固ニシ  
 往時ハ變化不定ト稱說セレ事モ漸ク世代ヲ逐フテ整  
 理シ皆盡ク預知先見スヘキニ至ルオヤ是ヲ以テ之ヲ

是レ一也  
勵ヲ提  
施ス

推セハ、今日其未タ法則ヲ探究シ得サル事蹟ト雖、唯  
變化不定ノモノト唱道シテ、其穿鑿ニ怠ルヘカラス、能  
ク其ノ規律ヲ廻顧シテ、以テ將來ヲ推測シ、今人ノ發見  
シ能ハスト稱スル所ノ者ト雖、後世必ス明解セラル  
、ニ至ルヲ許認セサルヘカラス、蓋シ是ノ如キ變化混  
雜ノ中ニ於テ、其ノ一定ノ法則ヲ發見セント欲スルハ、  
理學諸科ニ從事セルモノ比々皆是ニシテ、殊ニ卓絶ナ  
ル學士ノ懇望スル所ナリ、然リ而シテ、今古史家ニ於テ、未  
タ此期望ハ一般ニ行ハレサルハ、一ハ其能カ遠ク物理  
學者ニ及ハサルト、一ハ入事ノ現象ハ、他ノ物理ヨリ負  
カニ混淆錯雜セラルニ由ルハ、ト云ハサルヘカラス、

二原因ノ妨  
碍

史理ノ困難

以上一節ハ、本書編述ノ目的ヲ論ス、

歴史ヲ使テ、學科ノ一二位セシメサル者ハ、即チ此二原  
因ノ妨碍スル所ニシテ、古來歴史家ト雖、其智力、ケ  
レ、ニユートン、及其他高名ノ諸家ト頡頏スヘキ者ナ  
キニ非ス、然ルニ、其ノ全カヲ史學ニ用井サルヲ以テ、最  
モ有名ノ者ト雖、之ヲ物理學中ノ大功績ヲ顯セシ者  
ニ比較セハ、其ノ及ハサルト萬々ナリ、蓋人事ノ錯雜紛  
亂ハ、固ヨリ造化變化少キノ比ニアラスシテ、史理ノ編  
述、其ノ困難亦最モ甚キヲ以テナリ、何トナレハ、身外事  
物ハ、縱令至難ノ事トイハドモ、試驗經驗ニ由テ之ヲ分  
析シ得ルハ、雖、人事ニ至リテハ、容易ニ此大方便ヲ適

用スルハ能ハサルハミナラス、其ハ聞見議論往々偏見私情ヨリ生スル所ハ謬誤ヲ犯シ易ケレハナリ、故ニ既ニ大ニ上進シタル物理學ニ比スレハ、人事學ノ尚幼稚ナルハ、又何ソ之ヲ異シムニ足ランヤ、且別ニ此二學科ノ間ニ於テ、其進步ノ大ニ相異ナル所以ノモ、ノアリ、何ソヤ、物理ノ學ニ於テハ、其ノ未タ實証ヲ探リ得サル者ト雖モ、直ニ其ノ事ニ規律アルヲ許認シ、又之ヲ先見前定スヘキノ權ヲモ許與スレモ、人事ニ於テハ、只其ノ事ニ規律アルヲ許認セサルノミナラス、亦却テ之ヲ排撃ス、故ニ史學ヲ把テ、他ノ諸學科ト、同等ノ地位ニ立シメントスル者ト雖モ、人事ハ、奧妙ノ神祕ニ係リ

物理ト人事ノ差異

妄想ノ説

人智以テ其ノ穿鑿ヲ容ルヲ許サス、亦常ニ將來ノ成跡ヲ看破セシメサルモノナリト、先ツ其ノ胸中ニ困難ノ念ヲ起ササル者ナシ、然ルニ余ヲ以テ之ヲ論スレハ、其ノ言太夕曖昧其ノ事タル試験ヲ以テ之ヲ証スヘカラス、其ノ理亦取ルヘキノ所ナケレハ、全ク妄想ノ説ト云ハサルヘカラス、加之智識愈發達スルニ隨フテ、其形勢相同ケレハ、其發起スル所ノ事モ、亦必前後相接続シテ相違ハスト、他ノ諸學科ニ於テ許認信用スル所ノ者ニ相背戾スレハ、其ノ説遂ニ伸張ノ地ナカルヘシ、而今又一層深ク此ハ世論ヲ究極シテ、歴史ハ、永ク即今ハ體裁ニ停止シ、決シテ一科學ハ、地位ニ至リ得サル者カヲ問



凡ノ三事

フ時ハ到底人ノ行為ハ一定秩然ハ法則アリテ之ニ支配セラルルハ或ハ變化不定ハ者ニ起ルカ彼ハ鬼神秘密ハ指命ニ出ツルカト云フ所ハ一大疑難ノ外ナラス而ノ此問題ニ就キテハ又頗ル著大ナル議論ナカルヘカラス

以上二節ハ史家ノ才識乏シク人事ニ法則アル証ヲ發見スル能ハサルヲ論ス

何トナレハ此問題ニ就キ開化ノ程度何如ヲ表スル所ノ二説アレハナリ先ツ其一説ニ據レハ凡ソ人事ハ皆變化不定ナル者ニシテ偶然ニ出サルナシト此ノ如キノ説ハ必ス矇昧蠢愚ノ民間ニ行ハル者ニシ其ノ經

開化程度何如ノ二説

漁獵

耕耘

驗稍其ノ數ヲ重テ天地ノ事物皆盡ク整然順序法則ノアルヲ知ラシメハ直ニ消滅ニ歸スハ以テ假設ハ水草移轉ノ蠻族曾テ開化ノ彩光ニ映セス專ラ漁獵ヲ以テ其ノ生ヲ營ムニ當リテ其ノ必要ナル食物ヲ獲ル皆其ノ偶然ニ出テ更ニ來由ナキモノト如ニシテ其ノ理ヲ審ニセサルヘシ且其ノ供給時アリテ富ミ時アリテ乏シク變化測スヘカラサレハ豈其ノ到底造化ノ結構ニ於テ彼ノ一定不易法則ノ如キモノアルヲ信センヤ又況ヤ事物ノ順序ヲ支配シ能ク之ヲ推窮セハ夫ノ將來ノ事物ト雖モ預定先見セラルヘキノ大條理ナル者アルヲ思ハシヤ然ルニ此蠻族稍進シテ耕耘ノ業ヲ營ム

英園之時史 第一卷

十一

開化ノ階級

造化ノ法則

地位ニ至レハ、只其ノ搜獲セル者ノミナラス、其ノ化生  
 セシメ、其ノ親シク口服飢餓ニ供スル者、皆悉ク自己ノ  
 勤勞ニ出テ、自己ノ指令ニ歸スルヲ覺ルニ至リテハ、  
 其ノ民漸ク事物ノ結構ヲ發明シ、而シテ其ノ沈種ノ日ヨ  
 リ、生育シテ穀實トナルニ至ル迄、其ノ間次第ノ整然一  
 轍ナルヲ知ヘシ、而シテ此際尚ホ未タ必然ヲ以テ事物ノ  
 順序ヲ期スル能ハスト雖モ、其ノ水草移轉ノ舊時ニ比  
 スレハ、其ノ信ヲ將來ニ置テ亦甚ク大ナリトス、是ヨリ  
 恍然トシテ、事物悉ク定則アルノ思念ヲ起シ、始メテ造  
 化ノ法則ト稱セラルヘキ所ノモノ、一端ヲ解悟スル  
 ニ及ヘリ、而シテ又漸次開化ノ階級、其ノ燈ヲ進ル毎ニ見

蒐輯條疏

聞ノ廣キヲ如ヘ、經驗ノ多キヲ積ミ、其前年ハ、曾テ其ノ  
 腦中ニ發出セサリシ所ノ規律モ、今ハ屢之ヲ發見シ、遂  
 ニ當初固持セシ所ノ變化不定ノ説モ、亦自ラ其非ヲ知  
 ルニ至レリ、又一步ヲ進メハ、事物ヲ離レテ、理論ヲ起シ、  
 其ノ見聞スル所ノ事物ヲ蒐輯條疏シ、遂ニ其舊説ヲ拋  
 棄シ、總テ天地間ハ事物ハ皆其ハ前事ニ連續斷ハカ  
 ラサル關係ヲナシ、宇内殆ント鎖連珠貫ハ端ナキ如ク、  
 人皆其ハ内ニ在リテ各其ハ一分ヲ奏ストイヘトモ、亦  
 自カラ其ハ職ハ何タルヲ知ラサル下ヲ認許スル者往  
 々其ハ中ニ生スルニ及ブナリ、

以上一節ハ、心思自由ト命數預定ノ本原ヲ論ス、

偶然ノ説及前後接續ノ説  
心思自由ト命數預定

一種部類ノ人民

是ヲ以テ通常社會ノ進歩ニ於テハ天然萬物ノ法則アルヲ信用スルニ隨ヒ、彼ノ偶然ノ説自ラ衰滅ニ就キ、前後接續ノ説之ニ替テ發起スヘシ、予敦ラ之ヲ考フルニ、恐クハ彼ノ後來ノ心思自由ト命數預定ノ二説ハ、此ノ偶然ノ説及前後接續ノ説ヨリ淵源セシモノナルベシ、然リ而シテ社會ノ景況稍開明ニ進ニ當リ、此變化ノ起源ヲ推測スルヲ亦太難シトセス、夫レ何レノ國ヲ問ハス、富殖某ノ地位ニ進達スレハ、各人其ノ勤勞ヨリ產生スル所ノ者ヲ以テ、其ノ供給ニ餘剩ヲ生シ、人々必カ作テ為スヲ要セスレテ其間自カラ一種部類ノ人民ヲ生シ、畢生歡樂ヲ事トシ、光陰ヲ送ル者アリ、而シテ亦少ニ智識ヲ

新理學新教法

練磨シ、學術ヲ講習スルモノアリ、其中又其ノ意ヲ身外ノ形狀ニ用井ス、只管心思ノ靈動ニノミ注目スルモノアリ、若シ此ノ如キ人、大能力ヲ有スルトキハ、新理學及新法教ノ設立者トナリ、屢之ヲ奉戴スル所ノ人民ヲ使テ、非常ノ感動ヲ蒙ラシム、然ルニ其ハ新設立ノ鼻祖タル是等ハ人モ亦自カテ當時ハ性質氣風ニ感染セラレ、以テ未タ曾テ衆論ハ壓迫ヲ脱出シタルモノアラズ、故ニ其新理學新法教ト稱スル所ハ議論モ其ハ實ニ非ハ、獨自一個ノ意見ヲ立テ、新ニ創建シタルモノニ非ズ、只當時ハ學者中ニ行ハレタル議論ヲ修飾シテ、聊カ之ニ新法向ヲ示シタル者ニ過キ、故ニ今論スル所ノ

性理學者及  
神學者

身外ニ於ケル事物偶然ノ。說ハ、身内ニ於ケル心思自由  
ノ。說ニ相同シク、而前後接續ノ。說ノ數命預定ノ。說ニ相  
合セルハ、亦之ト異ナラス、但心思自由ノ。說ハ性理學者  
ノ修飾ニ係リ命數預定ノ。說ハ、神學者ノ潤飾ニ係ルノ  
差アルノミ、性理學者ハ、偶然ノ。說ニ原キテ、其ノ放恣不  
羈ノ理ヲ心思ニ及ホシ、遂ニ新學科中ニ於テ之ヲ心思  
ノ自由ト稱ス、此名稱タル自由ハ、實ニ簡潔ニシ、凡百ノ  
難題ヲ一掃スルニ足レリ、何トナレハ、自由ハ、即チ諸行  
為ノ元質ニシテ、他ニ之ヲ引起スル者ナク、彼偶然ノ。說  
ト同一別ニ之ヲ尋釋スルノ術ナキヲ以テナリ、又神學  
者ハ、接續ノ。說ヲ採リ、其ノ教法ニ之ヲ改鑄シ、而ハ彼徒

既ニ、事物ハ順序法則ノ、整然一徹ナル者アルヲ知得ス  
ルヲ以テ、此ハ真確變易スヘカラサルハ規律ヲ把テ盡  
ク之ヲ天神ハ預命ニ歸シ、其ハ平生主張スル所ハ萬物  
太初ヨリ皆神ハ預命ニ出ルヲ証シ、併テ其ハ真神惟一  
ナル辟說私見ヲ主張スルハ具トナセリ

以上一節ハ、命數預定ノ。說ハ、神學ニ出テ心思自由ノ  
。說ハ、心理學ヨリ來ルヲ論ス、

心思自由ト、命數預定ナル、此反對ノ兩說ハ、寔ニ人生暖  
昧ノ事ヲ溶解スルニ於テ、實ニ安全簡便ノ法ニシテ、其  
ノ容易ニ解了シ得ヘキヲ以テ、世人此ノ兩說ノ間ニ歸  
依スル者、迥ニ其ノ半ノ上ニ出タリ、亦以テ現今中人ノ

智識ノ本源

才智ニ適合セルヲ見ルヘシ、然ルニ此兩説ハ大ニ吾輩  
 智識ノ本源ヲ濁スノミナラス、又教服分裂ノ基ヲナシ、  
 其ノ宗黨ノ睥睨ヨリシテ、屢社會ノ紛亂ヲ興シ、又頻リ  
 ニ平常交際ノ妨害ヲナセリ、幸ニシテ近來歐洲有識諸  
 學士、此兩説ノ醇正ナラサルヲ識リ、或ハ未タ全ク非ナ  
 ラサルモ、其真正十分ノ明証ナレト云フ者多キニ會セ  
 リ、而シテ此兩説ハ此書ニ於テ最要ノ事項ニシテ、其ノ關  
 係亦甚大ナレハ、他ノ事件ヲ論述スルニ先ツテ、此兩説  
 中ノ諸疑難ニ於テ、余輩ノ得テ解拆スヘキ所ヲ解拆シ、其  
 是非得失ヲ論究スルハ、又目今ノ急務ナリ、  
 心思自由ト命數預定ノ兩説ノ因テ發起スル所ハ、果シ

造物

テ予カ前説ニ於テ反覆論辨セシ如クナルヤ、或ハ疑難  
 スヘキ者アリヤ、得テ知ルヘカラスト雖也、今日現事ヲ  
 以テ之ヲ判スレハ、其ノ思想ノ基礎本源ト指示ス可キ  
 者ハ、決シテ吾カ所説ニ出テサルベシ、命數預定ノ説ハ  
 神學者流ノ思想ニ起リ、心思自由ノ説ハ、心理學者ノ考  
 察定ニ成レリ、而シテ今能ク其ノ命數預定ノ説ヲ深思  
 考索スレハ、古來說ク所ノ說術ニ於テハ、其ノ結局實ニ  
 拙陋ノ笑ヲ免レサルモノアリ、夫ノ造物ノ真神ノ如キ  
 モ、其ノ一方ヨリ之ヲ看レバ、其ノ功德無邊無限ナル如  
 シト雖也、亦其ノ一方ヨリ之ヲ察レバ、神ハ正邪辨別ノ  
 分界ナク、皆自己ノ意ヲ以テ之ヲ定メ、又其ノ未生ノ物

ヲ使テ之ヲ生セシメ、之ヲ滅セシムル等、一ツニ其ノ威  
力ニ任セザルナシ、而シテ神ノ斯ノ如キ取捨生滅ノ權  
ヲ行フニ於テ、曾テ道義ノ之カ標據目準ト為ス可キモ  
ノ在ツテ、之ヲ為スニ非ス、只專ラ自己ノ威カヲ以テ、之  
ヲ擅制スルモノナリト、此ノ說新教中ニ在テハ、奇抜雄  
偉ヲ以テ稱セラレタル、カルウ井ン氏ニ發セリ、然ルニ、  
氏ハ、只其說述活潑ナルノミ、其ノ持論ハ、暗澹鬱莽ト云  
ハサルヘカラス、蓋カルウ井ン氏ノ此說ノ起原スル所  
ハ、舊教家ノオーグスチンニシテ、オーグスチンハ、之ヲ  
マニクノ學派ヨリ受ケ、唯之ヲ潤色セシナリ、今此論旨  
ハ、其ノ宗教ノ大本タル、他ノ諸論ト相矛盾スルト、否ト

アルメニヤ  
教  
良知

ニ論ナク、其ノ說ク所、人智ノ域外ニ在ルヲ以テ、其ノ果  
シテ真正公道ナルヤ、又荒唐妄誕ナルヤ、余輩之ヲ論定  
スルニ由ナシ、故ニ文學攻索ハ、一途ニ於テハ、唯ニ一個  
ハ空論ナリト見做サハルヲ得ザルナリ、  
心思自由ノ稱ヲ以テ、久シク世間ニ行ハレタル一說ハ、  
既ニアルメニヤ教ヨリ發出セシ如シト雖、其ノ實、人  
ノ良知ハ、至尊タルノ心理學ノ主義ヨリ淵源セシ者ナ  
リ、其ノ徒ノ言ニ曰ク、人若シ自カラ其ノ身ヲ省ミル片  
ハ、已レハ唯一個自由的ノ一物ナルヲ悟了シ、復タ必  
中心ニ之ヲ信ズルモノナリ、而シテ、此ノ心思ノ自由ヲ  
施行スル所、良知ハ、固ヨリ不正邪惡ノ考察ヲ以テ、之

自擅ノ二項

ヲ移易ス可キ能フ所ノ者ニ非スト、今是ノ尋常普通ノ  
 理論ヲ置キ、專ラ良知ニ據ツテ、事理ヲ論定スルトキニ  
 ハ、其ノ中自擅ニ偏スル所ノ者、二項アリ、其一ハ設令其  
 理由公正ナリト雖、之ヲ証明ス可キ標據ナク、其ノ二  
 ハ、全ク非ヲ見テ是ト認ムルモノアリ、此等ノ缺目ハ凡  
 人ハ他人ノ得テ鉗制シ能ハザル所ノ良知アリ、而此良  
 知ノ令スル所ハ、毫錯誤スルコトナシト、深自其良知ヲ信  
 スルヨリ出ル者ナリ、今其第一項ニ就テ之ヲ論シニ良知  
 ハ一個ノ靈能ナリト云モ、亦決シテ信ヲ置キ難シ、何トナ  
 レハ先哲諸賢ノ中往々良知ヲ以唯心ノ狀ナリト解説  
 スル者アリ、此說果シテ其當ヲ失ハザル者ナラシメハ、古

良知ハ心ノ狀



此輩有殊  
味請者  
宜多刺之

必得深  
如德博  
收怨如  
別品焉

人間是非  
好惡

來信シ來ル所ノ論旨ハ、更ニ採リ用ヲ可カラス、假令心  
 ノ狀ヲ使テ、百出誤リナキ者トナスモ、人ノ心意ハ、常ニ  
 同一ノ情勢ヲ以テ、同一ノ事變ニ際スレハ、必同一ノ成  
 績ヲ現シ得ルモノニアラス、然ルニ今少ク此ノ變化ヲ  
 許シ、其ノ第二項ニ就テ之ヲ論シ、暫ク良知ヲ以テ一個  
 ノ靈能トナスモ、其ノ令スル所ノ過失ハ古今ノ史中歴  
 ヲノ指數ニ違アラヌ、抑モ人間ノ是非好惡ハ、人智ノ開  
 進ニ隨テ大ニ其ノ旨ヲ變スル者ニシテ、古來法教理學  
 修身學ハ中ニ現出シタル所ハ事蹟ヲ以テ、當時ハ現況  
 ヲ推知スレハ、時或ハ之ヲ尊信シ又或ハ之ヲ笑罵シ是  
 非好惡殆ハト其ハ意ニ任スル者ハ如シ而シテ其ハ好





良知ノ監督

良知ハ一個ノ靈能ノ意中ノ心理學

裁定ニ於テ決シテ其ノ過リナキヲ保ツ能ハズ果シテ  
確然信據スルニ足ラサル者トセハ其靈能ト稱スル者  
モ亦決シテ之ヲ尊崇スルニ足ラサルナリ若シ果テ確  
然信據スルニ足ル者トセシカ常ニ此ノ良知ヲ監督指  
揮スル所ノ一物在ツテ存セサル可カラズ然ラハ良知  
ハ心思自由説ノ徒ノ主張スル所ノ至尊タルノ主義ニ  
背キテ良知ハ一個自由ノ靈能トナスヘカラス抑モ良  
知ヲ以テ一個ノ靈能ト見做スト否トニ關セズ今其ハ  
司令作法ハ如何ヲ以テ之ヲ考ハレハ予輩久シク意中  
ニ蓄藏セシ所ハ心理學ハ一個人々ハ心意ヲ以テ之ヲ  
億度驗索シ得ベキ所ハ學科ニアラス唯心理學ハ史乘

史乘ノ追究

追究ノ定標

ノ追究即チ人事諸般ノ徑過ニ依ツテ其ノ現出シ來ル  
所ハ無數ノ事跡ヲ蒐集シ先ツ其ノ之ヲ支配スル者ノ  
法則ヲ索メ此ハ二証ノ照會ヲ以テ始テ其ハ真確變ス  
可カラザルハ基礎ヲ起シ得ヘキナリ  
以上二節ハ人ノ行爲ハ心思ト外物ノ兩間ニ於テ其  
ノ顯レ來ル所ノ諸般ノ前事ニ起原スルヲ論ス  
幸ニ編者ハ史學創立ノ主眼トシテ此書ニ於テ命數預  
定ト心思自由ノ兩説ヲ取ラス只定標トシテ追究ノ針  
路ヲ決シテ論述スル者左ノ如シ然テ吾人ノ一事ヲナ  
スハ必ス之ヲナサントスルノ主旨アツテ後々之ヲナ  
スナリ而シテ此ノ主旨ナル者ハ亦自ラ之ニ先ツ所ノ事

アツテ、之ヲ感動引起スルモノナリ、故ニ吾人悉ク其ノ前事ヲ探盡シ、復タ之ガ作法ヲ究殫スル所ハ、又其ノ事ヨリ續起スル所ノ事ハ、又預メ之ヲ判断シテ毫釐ノ失誤ナキトテ得ヘキナリ、是レ余輩平生ノ持論ニシテ、事理ノ正鵠ヲ失セザル者ナリ、若シ舊説ニ汚セラレズ、証左ヲ目前ニ把リ、其ノ定論ヲ講成セル者アラハ、必ス相信シテ相疑ハサルベシ、例ヘハ、余輩某士ノ其平生ノ言行性質ヲ熟知スル所ハ、一朝某ノ形勢變化ニ際スルモ、某人士ハ必ス之ヲ處スルニ、某ノ策ニ出ル可シト、其ノ為ス所ヲ預知先見スルヲ得可シ、假令其ノ先見或ハ其ノ當ヲ失スルトアルモ、其ノ失ハ某人士ノ心思自由ノ

致ス所ニ非ス、又天命預定ノナス所ニモ非ス、或ハ一步ヲ讓リテ、此等ノ事變ヨリ、其ノ失當ヲ生セシ者トナスモ、曾テ其ノ証明ス可キ標據ナケレハ、余輩ハ斷シテ其ノ失當ハ、余輩カ先ニ某人士ノ言行動作ニ於テ未タ其ノ盡サミル者アリトナサザルヲ得ス、若シ能ク之ヲ識リ、能ク之ヲ盡スニアラハ、其ノ指ス所ハ明中ニ、其ノ言フ所ハ、適當シ、一行一為差異ナキトテ得可キナリ、然ラバ心理學ノ主旨タル所ノ心思自由ト、神學者派ノ命數預定ノ説ノ如キハ、斷テ之ヲ排却シ、余輩ハ決然人ノ行為ハ、其既往遂事ノ指定ニ外ル、一能ハサルヲ以テ若シ其ノ形勢相同シケレバ、其ノ結果モ亦必ス相同

形勢ト結果

内外ノ  
心外物

シト論定セザルヲ得ナルナリ然ルニ既往ノ事件ニ或ハ心内ニ之ヲ貯フル者アリ或ハ心外ニ之ヲ施ス者アリテ今古人事ハ變化即チ史上ニ載スル所ハ善惡禍福盛衰興亡ノ跡ハ皆悉ク心事ハ外物ニ接スルト外物ハ心事ニ接スルト彼是衝突相觸レ相動ス所ハ二原因ハ結果ト云ハサルヲ得ザルナリ

史理學ノ物

此ノ二者ハ皆ナ心志ノ由リテ以テ動作スル所ノ者ニシテ史理學ヲ構成スヘキ所ノ物料ナリ蓋吾人ノ心志ハ吾人ノ體中ニ在ツテハ常ニ吾人身體構造ノ法則ニ制鉗セラルモノニシテ若シ之ヲ使テ更ニ身外事物ノ刺衝ト制御ヲ受ケシムルトナクバ心志ハ獨リ其ノ

心外事物

自家固有ノ法制ヲ以テ浸々發育シテ止マザルヲ知ル可キナリ而シテ夫ノ心外事物即チ天然物料ノ如キモ彼等ハ亦自ラ彼等自家ノ法制ヲ存シ敢テ心志ノ制御ヲ要セザルヤ知ルヘキナリ然ルニ人ノ心志ハ常ニ事物ニ交接シ其ノ交接スル毎ニ復々之ニ依ツテ自家ノ性情ヲ攪發シ而シテ自家ノ知識ヲ發揚ス斯ノ如キノ遭際ニ在テハ心志亦復々其ノ自家天然ノ法則ヲ固守シ得ルヲ能ハズ自カラ外物ノ為メ遂ニ其ノ多少ノ針路ヲ移轉スルモノナリ故ニ事物ハ心志ヲ制御スルハ心志ノ事物ヲ變化スルハ心志ト事物ト互ニ相交接轉化シテ以テ人世無數ノ事變ヲ提起スル者ナリ

以上二節ハ、歴史ハ、心思事物ノ變化ノ掲載ニ成ルヲ  
論ス、

眼界ノ狀情

人ノ思想請願ノカ

事物顯象ノカ

前段論述セシ所ハ、二者變性ノ法則如何ヲ知ラント要  
セハ、須ク眼界ニ呈スル所ノ狀情ヲ以テ、之ヲ了解スル  
ヲ得可シ、而シテ其ノ眼界ニ顯ル、所ノ疑難問題ヲ把  
テ、歴々之ヲ考索セント欲セハ、先ツ其ノ人ノ思想ト請  
願ノカハ事物ノ顯象ヲ使テ、變化セシムル者過多ナリ  
ヤ、或ハ又却テ事物ノ顯象ノカヲ以テ、人ノ思想請願ヲ  
變化セシムル者數多ナリヤト、兩々其ノ例ヲ舉ケ、其ノ  
變性中ニ於テ、孰レカ最モ緊要ナルヤヲ究メザルヘカ  
ラス、何トナレバ、夫ノ心志事物ノ法則理由ヲ探リ、史學

活潑勢カ  
ル者微弱振  
ハサル者

心思ノ顯象

ヲ構成セント欲スレハ、其二者ノ中、其ノ最モ活潑勢カ  
アル者ヲ取テ、先ツ之カ考定ヲ下シ、而シテ後ナリ其微弱  
振ハサルモノニ及ボサミルヲ得ス、若シ此間斯ノ如キ  
ノ法則ヲ以テ、之カ標準トナシ之ヲ取レバ、其ヲ取ル所  
ノ其ノ作為結果ナル者ハ、皎著明白ナルヲ以テ、亦自カ  
ラ容易ニ其ノ理由ヲ判斷シ得ルノミナラス、勝勢者ノ  
法則ヲ以テ劣勢者ニ推及スルハ、劣勢者ノ法則ヲ以テ  
勝勢者ニ施スヨリハ、更ニ其ノ難易懸隔スル者アレ  
ナリ、然リ而シテ今予輩ハ此ノ論究ニ先ツテ心思ノ顯象  
ハ常ニ錯雜現出スルカ如クナレトモ、其ノ中亦自カラ  
秩然一定ノ法則アツテ存シ、決シテ變化偶然ノ者ニ非

論 道德上ノ理

追究ノ方法

數字表

ル所以ノ証左ニ就テ、方今既ニ探リ得タル所ノ一二ヲ  
 記スヘシ、是レ唯後論ノ為メニ重要ノ事ノミナラス、亦  
 自カラ前段ノ旨主ヲ明瞭ナラシメ、併テ予ガ本論ノ主  
 旨ヲ追究センカ為メニ、從來使用セシ所ノ諸方策ヲ觀  
 ルノ利アルベシ、  
 凡ソ古今道德上ノ理論ハ、大抵心理學ヲ基礎トシ、或ハ  
 神學ヲ以テ之カ標準トシ、之ヲ推究スト雖、今余カ為  
 ス所ノ考察ニ至リテハ、決シテ然ラス、其ノ論辨追究ス  
 ル所ノ方法ハ、一ツニ末事ヨリ本源ヲ尋ル所ノ推究法  
 ヲ以テ、之ヲ判スル者ニシテ、且其ノ証左トスル所ハ、浩  
 大無量、數十邦國ノ事實ヲ拾聚シテ之ヲ數字表ニ作レ

表紀數理

ル者ヲ以テシ、且其ノ材料ハ、大抵政府官吏ノ手ニ成ル  
 ヲ以テ、故ラニ之カ説ヲ附シ、或ハ之ガ真況ヲ變轉スル  
 一ナシ、何トナレハ假令之ヲ為ス一アルモ、其ノ官吏人  
 士ノ為メニ、毫一モ其ノ利スル所アル一ナケレハナリ、  
 而メ今其ノ用意ノ丁寧ナルト、其ノ拾聚ノ廣大ナルト  
 ヲ商量スレハ、其証左ハ定ニ貴重無量ノ位價アル者ト  
 云ツヘキナリ、  
 斯ノ如キ貴重信確ナル証左ヲ持シテ、人ノ行為事蹟ヲ  
 論スルニ於テハ、孰レノ黨派ヲ論セス誰カ取テ以テ真  
 正公道ノ定論ト為サザルヲ得ンヤ、何トナレハ、其ノ論  
 斷ノ根據定準ハ、統計ヲ以テ之ヲ定メ、其ノ説明証左ハ

善惡二種

諸統計家

數理ヲ以テ之ヲ明スヲ得レバナリ、而シテ此ノ推究法  
 ノ為ニ既ニ幾多ノ事理ヲ發明スルヲ知リ、又其ノ順序  
 變幻ノ模様ヲ究ムルキハ、人事ノ顯象ハ一定不變ノ規  
 律アルヲ許認スベシ、加之吾人今日ノ知識ヲ以テ其  
 ノ推究、其ノ當ヲ得ル者トセハ、尚ホ後來幾多ノ事理ト  
 雖、復必推究シ得ラル可キトハ、論ヲ待タズシテ明カ  
 ナリ、然ルニ後來未發ノ事理ハ、今之ヲ揣度スルヲ要セ  
 ス、唯此處ニ於テハ諸統計家ハ發明セル証左ヲ以テ人  
 事ハ必一定不變ノ規律法則アリテ存立スル所以ヲ説  
 明センハ、  
 人ノ行為ハ、其ノ區別甚ク明白ニシテ、善惡二種ノ外ニ

出テズ、蓋シ此二種ハ、互ニ相倚立シ、互ニ其ノ關係ヲ保  
 ツモノニシテ、之ヲ合スレハ、人ノ心術ノ全體ヲ構成ス  
 モノナリ、故ニ其ノ一方ニ之ヲ増セハ、必ス其ノ一方ニ  
 之ヲ減スルハ、是自然ノ道理ナリ、是ヲ以テ人民ノ惡行  
 ニ於テ、整然一定ノ規律アルヲ看出スルキハ、其ノ善  
 行ニ於テモ、亦必整然一定ノ規律アルヲ推知スヘシ、既  
 ニ其ノ善行ニ於テ、整然一定ノ規律アルヲ發明スル  
 キハ、又其ノ惡行ニ於テモ、亦必整然一定ノ規律アルヲ  
 ヲ決定スヘシ、今又言辭ヲ轉シテ之ヲ解セハ、人ノ惡行  
 ハ、社會ノ形勢ニ由テ變轉スルヲ發顯スルキハ、其ノ  
 善行モ亦必ス其ノ形勢ニ由テ變轉スルヲ決定セザ

社會感動ノ  
大原因

ルヘカラス、而ハ此ハ變化ハ、社會一般ニ感動ヲ與フル  
所ノ大原因、即チ闔國人民ハ氣風ヨリ引起スモハニシ  
テ固ヨリ人々一個ハ心思ヲ以テ為スヘカラザル者ナ  
リ、  
人ノ行為、若シ社會ノ形勢、即チ闔國人民ノ氣風ニ由テ  
支配セラル、モノナレハ、其ノ規律ハ則前段ニ示ス如  
クナルヘシ、若シ人ノ行為ニ於テ、是ノ如キノ規律ナク、  
變化偶然ノ者ナレハ、夫ノ心思自由ノ説ノ如ク、人々一  
個ノ氣質ニ任スルモノト謂テ可ナリ、是ノ故ニ今日何  
ノ國ニ於テモ、闔國人民ノ行為ニ於テ、整然一定ノ規律  
アリヤ、否ヤヲ論究スルヲ以テ、最大重要ノ事トナセリ、

統計表

而メ其ハ規律ハ有無ヲ決定スルニ於テハ、統計表ハ最  
モ無量ハ價直ヲ存スルモハナレバ、宜シク其ハ材料ヲ  
借リ、之ヲ考究セサルヘカラズ、

罪犯

一大學科

抑モ立法ノ目的ハ、罪犯ヲ懲罰シ、無辜ヲ保護スルニ在  
ルヲ以テ、歐洲諸國ハ、統計表ノ世ニ有益ナルヲ知ルヨ  
リ、直ニ、其ノ罰スベキ罪犯ニ就テ、其ノ證據ヲ類聚スル  
トト成リタリ、而シテ其ノ證據漸次ニ加増シテ、今ハ無數  
ノ事蹟ト成リ、遂ニ統計學ナル一大學科ト成ルニ及ヘ  
リ、然リ而シテ其ノ編輯條疏頗ル緻密ニシテ、且之ニ精密  
ナル注解ヲ等ヲ加ルヲ以テ、人性ノ何物タルヲ知ルニ  
於テ、其ノ利益ノ廣大ナルハ、寔ニ悉ク前代古人ノ經驗

殺害

ヲ合シテ、之ヲ對照比較スルモ遠ク相及ハサル者ト云  
 フベシ、然レモ方今ノ統計表ニ就テ、余輩ノ引用シ得ル  
 所ノ例証ヲ一々掲擧スルハ、此總論ノ能クスル所ニア  
 ラサレハ、余ハ將ニ其ノ例中ノ著大ナルモノニ三ヲ掲  
 載シ、以テ彼此相關係スル所ノ情狀ヲ示サントス、  
 大凡ソ、罪犯ノ中ニ於テ、殺害ノ事タルヤ、一定ノ規律ナ  
 ク、最モ前知スヘカラサル者ノ如シ、何トナレハ、今其ノ  
 現狀ヲ察スルニ、殺害ノ罪犯ハ、大抵兇惡ノ所業ヲ事ト  
 シ、其ノ極度ニ至テ、犯ス所ノモノ多シ、然ルニ、其ノ中間  
 タ一時ノ怒ニ乘シテ之ヲ犯スモノアリ、固ヨリ此惡業  
 ハ刑戮ヲ免カル、ノ僥倖ヲ得難シト雖モ、之ヲ謀ルニ

當テ犯者豫ノ恰好ノ時機ヲ望ミ、伏シテ其ノ機ノ到ル  
 ヲ待チ、遂ニ之ヲ犯スヲ得サルモノアリ、又時機既ニ  
 到リ其ノ地ニ臨ミ、其ノ心ノ俄ニ變スルモノアリ、又國  
 家ノ憲法ヲ恐レ、或ハ上帝ノ照鑑ヲ憚リ、或ハ其ノ良知  
 ニ責メラレ、或ハ後悔ヲ慮リ、又或ハ利慾、嫉妬、復讐、腦亂  
 等ノアル在リテ、正邪其ノ心中ニ攻撃シ、其ノ強弱ニ管  
 シテ、罪ヲ犯シ得ルト、犯シ得サルモノアリ、斯ノ如ク殺  
 害上ニ種々ノ原因アツテ、或ハ之ヲ教唆シ、或ハ之ヲ抑  
 制シ、其ノ變化捉摸スヘカラサルハ、其ノ中ヨリ生スル  
 所ノ行為ニ於テ、所謂一定規律ノ如キモノヲ探知シ得  
 ルハ、殆ント企望スヘカラサルニ似タリト雖モ、能ク事



ケテレツ

實ニ就テ之ヲ探討スルニ當テ斷然一定ノ規律アリ其ノ情狀恰モ海水ノ干満其ノ時ヲ差ヘス季候ノ循環其ノ期ヲ愆タサルカ如シケテレツト氏ハ畢生其ノ心力ヲ諸國ノ統計表ヲ狩蒐整理スル為ニ盡セシ者ナリ今此ノ辛苦考定スル所ヲ觀ルニ曰ク凡ソ各種ノ罪犯ニ於テ其數年々相均コレテ更ニ相違ハス就中殺害ノ如キハ大抵偶然不慮ノ争鬪ヨリ起ル所ノ罪犯ニシテ全ク前知スヘカラサル者ノ如クナレバ其ノ數年々相均キトモ他ノ犯罪ト相異ナルナシ豈驚怪ノ至リナラスヤ今之ヲ實際ニ徵セシニ只其ノ數ノ年々相均キノミナラス其ノ殺害ニ用井レ所ノ兇器ノ種類ニ至ルマ

表記家ノ鼻祖

罪犯ノ浮沈

テモ年々皆相異ナルトナシト同氏ハ歐洲統計家ノ鼻祖ニシテ右ハ一八八三年ニ明言セシ所ナリ而其ノ後チ之ヲ經驗スル者アル毎ニ愈其ノ言ノ妄ナラサルヲ証セリ蓋シ爾來ノ穿鑿更ニ一層ノ精密ヲ加ヘ罪犯ノ數ニ於テ其ノ一定ノ規律アルトハ夫ノ造化ノ法制ニ因テ支配セラル所ノ疾病死亡ヨリモ其ノ差異少ナク而シテ其ノ先見豫定亦甚ク容易ナリト一奇事ヲ証シ得タレハナリ今茲ニ其一例ヲ舉ケンニ千八百二十六年ヨリ千八百四十四年ニ至ルマテ全佛國中犯罪ノ為メニ罰セラレタル者偶然ニシテ巴里府中男子ノ死スル者ト其ノ數殆ント相均シク而シテ罪犯

總數ノ浮沈ハ、死亡者ノ浮沈ヨリモ、其ノ差異甚ク少ナシ、而シテ今其ノ罪科ヲ分析シテ、一一之ヲ觀ルニ、其ノ規律ノ整然トシ、一定ノ法則アルハ、唯其ノ罪犯ヲナスノ數ノミナラス、其ノ時期ニ至ルマテ、悉皆整然一定ノ法則ニ從ヘリ、

以上七節ハ、統計學ヲ以テ、人ノ行為中、故殺及ヒ其ノ他ノ罪犯ニ、悉ク一定ノ法則アルヲ論ス、

斯ノ如ク論述シ來レハ、夫ノ人ノ行為ハ社會ノ形勢ニ關係スルヨリ、多クハ人々一個ノ氣質ニ出ルモノトナスノ徒ハ、大ニ其ノ奇異ノ念ヲ引キ起スヘシ、然ルニ尚ホ一層吃驚ニ堪ヘサルモノアリ、凡ソ罪犯中殺害及ヒ

自殺

盜賊ノ如キハ、或ハ敵人ノ為ニ抗拒セラレ、或ハ司法ノ警吏ニ防遏セラレ、常ニ其ノ意ヲ果サシムルヲアリト雖、自殺ニ至テハ、時或ハ其ノ期ニ臨ミ、傍人ノ制止ヲ受クルトテ除クノ外、正ニ其ノ人一心ノ自由自在ニ屬シ大抵敵人ノ為ニ抗拒セラレ、トナク、又容易ニ警吏ノ防遏ヲ避クヘケレバ、此所業ハ全ク自己ノ手中ニ在リ、外物ノ妨礙ヲ脱シ、他ノ罪犯ヨリモ、其ノ意ヲ遂クルニ於テ、易々ナルノミナラズ、自殺ハ他ノ罪犯ト大ニ其ノ趣ヲ異ニシ、極テ其ノ黨與ノ怨讎ニ出ルトナケンハ、決シテ彼ノ心思自由ト名ツクル所ノ者ヲ誑惑スヘキ者ナシ、是ノ如ク、自殺ハ、獨立不羈ノ罪犯ニシテ、憲法之ヲ

支配スルヲ得ス、警戒嚴密ナル巡查モ之ヲ防遏スル能ハス、然ルニ其ノ罪犯ニ就テ、彼ノ如ク整然一定ノ規律アルハ、豈驚絶ノ至リナラスヤ、況ンヤ自殺ニ在テハ、常ニ充分ノ証跡ヲ得ヘカラサル者アリ、今假リニ水死ヲ以テ例フルニ、誤テ溺死セシ者ヲ投身セシ者ト認メ、又投身セシ者ヲ誤テ溺死セシ者ト認メ、以テ告狀スルトナキヲ保証スヘカラス、故ニ自殺ハ不羈不拘ニシテ他物ノ抑制ヲ受ケサルノミナラス、其ノ証跡モ亦甚タ曖昧ナリ、今此等ノ事ヲ歴考スレハ、其ノ之ヲ引起スル所ノ大原因ヲ探索スルハ、實ニ企望スヘカラサルニ似タリ、

閩國大勢

自殺ノ事タルヤ、右ノ如ク奇異ナリト雖、是レ亦閩國ノ大勢ヨリ發起シ、而ノ人々ノ之ヲ犯スハ、常ニ前年ノ景況ヲ繼承シ、之ヲ實際ニ布行スル者テ、ル一之ヲ余輩知ル所ノ証左ニ徴シテ、更ニ一差異ナキハ豈驚嘆ノ極ナラスヤ、凡ソ何レノ邦國ニ於テモ、若干ノ人負ハ、必ス其ノ生命ヲ自カラ斷絶スルヲ常トス、是レ一般ノ大法ナリ、而ノ之ヲ犯スノ何人ナルハ、固ヨリ刑ニ一科ノ小法アリテ之ヲ管スレ、小法ハ直ニ大法ニ從ハサルヲ得サル者ニシテ、此大法ノ大勢カアルハ、夫ノ世人ノ生命ヲ惜ミ、來世ヲ憚カル情ノ如キモ、亦以テ其ノ勢力ニ抵抗シ、自盡ノ行為ヲ萬一ニ救フヲ能ハサルナリ、而ノ

大小法

今此罪犯ニ一定規律アルノ原因ハ、後ノ書頁ニ於テ之ヲ論スヘシ、然ルニ此犯罪ニ規則アリト云フノミハ、凡ソ表記中其ノ記載セル、各國人民ノ行為ヲ熟覽セシ者ハ、皆能ク知ル所ニシテ、總テ統計表ノ備具セル國ニ於テハ、自カラ其ノ生命ヲ損盡スル者、年々其ノ貞數比例ノ相均シキヲ見ルベキナリ、故ニ今假リニ社會ノ形勢大變遷ナキ者トシ、又極少ノ差異ヲ許セハ、後來自殺人數ハ、則先見シテ預定スヘキナリ、世界中論叢ノ如キハ、至大至盛ノ都府ニシテ、變化常ニ定ラス、或ハ政令ノ為ニ紛亂ヲ起シ、或ハ貿易ノ為ニ爭擾ヲ生シ、或ハ食物沸騰ノ為ニ困厄ヲ醸シ、事物往々自殺ノ原因ヲナサザル

者ナシ、故ニ人事ニ規律アルヲ信スル者ト雖、深ク此大都ニ其ノ規律ヲ望ムト能ハスト雖モ、其ノ整然一定ノ順序アルハ、大ニ其ノ期スル所ニ超ヘタル者アリ、年々倫敦ニ於テ自殺スル者、其ノ數大略相均クシテ相差不ス、固ヨリ其ノ年ノ形勢事情ニ由リ、其ノ差ナキヲ免レスト雖、多キハ、二百六十人、少ナキハ、二百十三人、平均凡ソ二百四十人ヲ定數トセリ、千八百四十六年ハ、鐵道事件ノ為ニ大騷動ノ起リシ年ニシテ、倫敦府ニ自殺人ノ數二百六十六人アリタリ、千八百四十七年ハ、其ノ數稍々減少シテ、二百五十六人ニ下レリ、同四十八年ハ、二百四十七人アリ、同四十九年ハ、二百十三人アリ、同

法律持論、品行風俗、

五十年ハ二百二十九人アリタリ、  
右ノ如ク社會ノ形勢相同シケレハ、其ノ罪犯モ亦相均  
シク、其ノ人負モ亦秩然規律アルノ趣ヲ述ヘタリト雖  
モ、尚又此事ヲ確証センカ為ス、一段論述セサルヘカラ  
サル者アリ、抑モ此罪犯ノ事タルヤ、徒ニ一二ノ事蹟ヲ  
採録シテ、敢テ杜撰ヲ為スニアラス、開化其ノ等ヲ同ウ  
セス、法律ヲ異ニシ、持論ヲ異ニシ、品行風俗ヲ異ニセル  
諸國ヲ涉臘シ、其ノ事蹟ノ數百萬ヲ聚メテ編述スル所  
ノ罪犯ノ統計ニ據ルモノナレバ、其ノ公正確實ナルヲ  
知ルベシ、況ンヤ其ノ統計ハ、特ニ其ノ職ニ任シ、考據ス  
ヘキ記録ニ富ミ、能ク方便ヲ盡シ、且脚ヲ事實ヲ狂クル

ノ意ナキ人ノ手ニ成リタルコトヲ合セ考フレバ、罪犯ニ  
一定整然ノ規律アルコトハ、統計中、其ノ他種々ノ條項ニ  
比スレバ、一層判然トシテ証明シ得ラルヘシ、此外統計  
中考索ノカヲ極メ、萬種ノ形勢事情ニ就テ、其ノ搜索シ  
得タル所ノ例証ヲ見ルニ、悉ク同一ノ方針ヲ示サザル  
者ナシ、然ラバ、人ノ罪戾ハ、職トシテ社會ノ形勢ニ原ツ  
キ、犯者一個、惡念ヨリ起テサルヲ判決スヘシ、而シテ此論  
ハ、今日廣ク世上ニ行ハレ、一般其ノ確實ヲ承認スル所  
ナレハ、假令ハ性理學者及シテ神學者流巧ニ夫ハ事實ヲ  
擾亂スル所ハ昔時ハ億説ヲ持シテ之ヲ壓倒セシト雖  
モ、ハルモ決シテ能ハサルハ、ハシナラス、又之ヲ難セシト雖

入ルモ亦能ハカル所ナリ、

以上三節ハ自殺ヲ以テ前論ヲ証シ、重テ統計學ノ確  
信スヘキヲ論ス、

擾亂者

若シ造化法制ノ如何ヲ察シ、其ノ物體上ノ施行ニ於テ  
其ノ間自カラ擾亂者ノアルヲ識了スレハ、人事ニ於  
テモ亦幾多ノ擾亂ヲ免レサルヲ察知シ得ヘキナリ、今  
此ノ擾亂妨礙ノ其ノ起原ヲ索ムレバ、其ノ小法其ノ大  
法ト、時アリテ相衝突激昂シ、大小ノ法則孰レモ其ノ本  
分ノ動力ヲ變スルヲ以テ、斯ノ如キノ波瀾ヲ起ス者ナ  
リ、例セハ、器械學中集成力ノ定則ニ於テ、各個動力ノ強  
弱ニ準シ、其ノ長方形ノ對角線ニ、其ノ方向ヲ與フルカ

大小ノ法則

集成力ノ定則

長方形ノ對角線

空氣ノ摩擦  
物體ノ疎密  
剛柔元素  
異同分子ノ  
位置

如シ、然リト雖、吾人今此ノ集成力ノ定則ニ從ツテ、實  
地ニ之ヲ施行セント欲スルニ臨ミ、空氣ノ摩擦、其ノ移  
動セントスル所ノ物體ノ疎密剛柔ヨリ、元素ノ異同、又  
ハ分子ノ位置等、其ノ他諸般ノ諸小法ニ抵觸シ、亦充分  
ニ此自己ノ定則ヲ達セシムルヲ能ハサル者ナリ、斯ノ  
如ク定則ハ大法ハ、許多ノ擾亂ニ因リ、其ノ本分ノ動力  
ハ失ハ如シト雖、其ノ大體ニ至リテハ、決シテ毫釐モ  
之ヲ變セサルナリ、故ニ人間善惡ノ行為ハ、人々一個ノ  
心志嗜好ヨリ出ル者ニ非スシテ、唯前事ノ關係ヨリ生  
ズル所ハ、大法モ亦同一他物ノ擾亂ニ依リテ時々其ノ  
真成ハ布行ヲ違亂スレトモ、其ノ大法ニ及ハテハ、亦決



迄亦一般ノ規律ニ關シ、尙ホ一定不變ノ常則アリ、近來  
倫敦ト巴哩ノ郵便局ニ於テ、出簡人ノ疏忽ニ由リ、誤テ  
届先ノ名ヲ闕ケル書牘ノ數ヲ公布セリ、其ノ時變ノ妨  
碍ヲ許セハ、年々兩國ノ公告ニ於テ、錯誤ノ數、其ノ比例  
ヲ同フセリ、是ニ由テ之ヲ考フレハ、將來差誤出簡人ノ  
數モ、亦斷定スルヲ得ヘキナリ、  
人事ニ規律アルト、人ノ行為ノ前因ヲ繼承ヲシテ、決シ  
テ前後相背反スルコトナキハ、前段大略ヲ盡セリト云フ  
ベシ、今日吾人ノ知識尙ホ淺近ナルヲ以テ、事物整正ノ  
大法則ヲ詳ニスルコト能ハスト雖、既ニ事物皆順次法  
則アルコト此ノ如ク分明ナルヲ知レハ、其ノ極メテ、變化

歴史ノ管鑰

不定トナス所ノモノ、雖、亦必ス其ノ大法則ノ一部  
分ナルコト判スヘキナリ、此大法則ハ、即チ歴史ノ管鑰、及  
基礎ナルコトヲ理解シタル者ハ、上ニ記載シタル事ヲ見  
ルモ、決シテ奇異ノ念ヲ生セサルノミナラズ、必ス之ヲ  
許認ススシ、當之ヲ許認ルノミナラズ、之ヲ知ルハ、既ニ  
晚シト言ハンノミ、寔ニ現今ハ、文學大ニ闕ケ、其ノ進歩  
モ亦甚ク疾カナレバ、今日ノ百年ヲ出ズ、斯等ノ理由ハ  
皆其ノ原因ヲ發見スヘシ、果シテ其ハ時ハ、人事ニ  
規律アルヲ肯セサル、史家ハ罕ナルハ、今日進化ニ規  
律アルヲ肯セサル、理學家ハ少ナルハ、如何ナルハ、是  
ハ余ハ深ク信シテ相期スル所ナリ



以上二節ハ婚姻及過誤出簡人ノ數ヲ舉テ前証ヲ補  
ヒ併ニ後來事物ノ判スヘキヲ論ス

右ニ揭ケタル所ノ人ノ行為ニ規律アルノ例証ハ悉ク  
統計表ヨリ抽出シタルハ既ニ明瞭ナルヘシ然リ而  
シ此統計學ハ尚ホ幼稚ノ位ニ在リト雖氏人ノ性理ヲ  
講究スルニ於テハ其ノ他諸學科相合シテ相敵スルト  
雖氏尚ホ速ク相及ハサルベシ今統計學者ハ他ノ諸學  
科ニ於テ其功績ヲ榮セシ所ハ末事ヨリ溯テ其本源ヲ  
尋ル所大法則ヲ模倣シ之ヲ人事ノ推究ニ借用シ且ハ  
經驗ノ數ヲ積ミ遂ニ真理ヲ探討スルニ一大方術ヲ設  
ケ得タリト雖氏人事ノ完整ハ必シモ此學術ハミト為

統計學ハ幼  
稚ノ位ニ在

人事物理ノ  
阻隔

ハヘカラス又古來物理學ヲ把テ修史ノ材料ト為サ  
ルハ以テ必物理學ハ史家ハ為ルニ無用ハ者ト為スヘ  
カハス且人事ト身外事物ト常ニ相感觸スル所以ヲ觀  
レハ人ノ行為ト造化ノ法制トノ間ニ於テ親密離ルヘ  
カラサル關係アルハ知ルヘキナリ抑モ從來歴史ヲ修  
ムルニ物理學ヲ用ヒサル所以ハ歴史家タル者人事ト  
身外事物トノ關係ヲ知ラザリシニ由ルル然ラザレ  
ハ之ヲ知ルト雖氏是ヨリシテ生スル所ノ動作ヲ推究  
スル所ノ智識ナカリシニ由ルルハ是ヲ以テ人事  
物理ノ二大學科ノ間ニ於テ大ニ天然ナラザル所ノ阻  
隔ヲ生シ遂ニ其ノ黨厭ヲ異ニ以テ其ノ學術ヲ辨

スルニ至リ、豈慨嘆堪ハケンヤ而シテ今日、歐洲中此ノ  
造ハ欄柵ヲ破リ、此ハ業習ハ一洗セシムル者、往々  
自カテ世上ニ發顯セ、カハニ非スト、雖モ未ク能ク其ハ  
目的ヲ達シ、カハ者ヲ見ス、修心學者、及性理學者、輩ハ  
徒ラニ舊套ハ説テ、株守シ、物理學者ヲ輕視シ、常ニ其ハ  
學業ヲ疏斥シ、或ハ法教上ハ障魔ナリトシ、或ハ人智ニ  
過信ヲ置クハ、妄見ニ坐スル者トシ、而シテ物理學者ハ亦  
其ハ學ハ日ニ闢ク、其ハ勢ハ日ニ盛ナルヲ見テ、喋々其  
ハ成功ヲ自負自賛シ、其ハ己カ日新發明ハ、事蹟以彼邊  
巡常ニ進マカハ、所ハ景狀ニ比シ、愈々之ヲ輕賤スルニ  
及ヘリ、

此際ニ當リ、此二黨ノ中間ニ介シ、其ノ紛議ヲ生セシ所  
ノ點ヲ明示シ、其ノ事端ヲ寢ムルハ、史家ノ責任ニレテ  
即チ史學ノ基礎大本ヲ建立スル所以ナリ、何トナレハ  
歴史ハ人事ヲ記スル者ニシテ、人事ハ惟ニ内外現象ノ衝  
突ニ由テ發顯セラル、者ナレハ、此二種ノ現象、其ノ相  
關係スル所ノ要點ヲ講究シ、遂ニ其ノ穿鑿ヲ以テ、現在  
性理、物理ノ二大學派ニ於テ有セル所ノ方術ヲ移シテ、  
將來發明ノ資トナスハ、亦緊要ノ事ナレバ、今余ハ  
次ノ二編ニ於テ是等ノ事物ヲ論究セントス、而シテ予ハ  
論若シ幸ニ此大事業ニ於テ幾分ハ裨益ヲナシ、ハ  
ハ夫ハ相關係シテ相離ハカカハ、所ハ二現象ヲ分

二現象ノ要

二現象ノ要

割、吾人智識進路ニ横絶スル所ハ廣野雄大ナル崩裂  
ヲ填埋スルニ於テ此書一覽ハ功ヲ奏セリト言ハヘキ  
ハシ

以上二節ハ統計學及物理學ノ修史ニ重要ナルト方  
今史家ノ責任ヲ論ス

伯克爾英國文明史第一編終



東 京 圖 書 館  
 新 門 二 四 號  
 八 部 五 架  
 十 類 號

伯克爾 著

英國文明史

土居光華 監

全譯 第貳編上

東京朝日新聞  
東洋通商  
書局

氣候食物地質及ヒ天造

伯克爾英國文明史第二編

土居光華  
萱生奉三  
全譯

邦國ノ編制、人民ノ性質、造化ノ法ニ因テ支配セラレタル景況ヲ論ス、

人間ハ最モ嚴シク、最モ烈シク、感觸引誘ヲ受クル所ハ、身外事物ヲ推究スルニ、即チ四箇ノ種別アリ、何ハヤ、氣候、食物、地質、及ヒ天造ノ光景。日月、星辰、風、雨、雷、雲、霞、蛇、地震、山川、湖、海、禽、獸、草、木、疫、癘、是レナリ、天造ノ光景トハ、大約吾人ノ眼前ニ現出スレドモ、彼是ノ感覺ニ依テ、各自ノ心思ヲ誘ヒ、其方向

一國ノ思想

ヲ變セシメ、遂ニ一國ハ自カラ、一國ノ思想ヲ造リ作ス  
所ノ模様ヲ云フナリ、凡ソ人間ニ永久脱スベカラサル  
感動ヲ與フル所ノ、身外萬種ノ事物ハ、總テ此四種ノ一  
ニ管屬セラレサルナリ、抑モ余ハ所謂天造ハ光景ト稱  
名ス所ハ者ハ人間ノ妄像ヲ鼓動シ無數ハ迷溺ヲ惹起  
シ、發達開智ハ大妨碍ヲ為スモハナリ、蓋シ人民矇昧ハ  
世代ニ於テハ、迷溺ハ勢力最モ強大ナルモハナリ、故ニ  
此天造種々ハ光景ハ種々ハ人民ニ就テ種々ハ感觸引  
誘ヲ起シ、人民ハ性質ヲ種々ニ鎔成シ、遂ニ其國教ノ派  
別ヲ生シ、其弊多クハ終古相撤シ相脱ス能ハサラシム  
ルニ至ルナリ、氣候、食物、地質ノ三者ハ、斯ノ如ク、直接重

國教ノ派別

人種ノ異同

大ノ感觸ヲ為サスト雖、邦國ノ編制ニ於テ、又至緊至  
要ノ關係ヲ為スモノナリ、人種異同ノ如キハ、乃チ此三  
者ノ致ス所ニシテ、萬國之カ為メニ、大ニ其形情ヲ異ニ  
シ、遂ニ之ヲ以テ、口實ト為スニ及ヘリ、元來人種ニ固有  
ハ別アリト云ヘルハ、全ク假裝ハ説ニシテ取ルニ足ラ  
サルナリ、余ヲ以テ之ヲ察スルハ、此差異ハ氣候、食物、地  
質ハ三者ハ支配スル所ヨリ、原因ニ來ルハ、太カ明白カ  
ル、今若シ此理ヲ知得セハ、史上ノ紛難ヲ解シ、千古ノ矇  
昧ヲ洞開スルニ至ルヘシ、故ニ、余、今、先ツ此三者ノ法制  
ヲ吟味シ、亞テ、天造ノ光景ニ及ボシ、而メ、此身外事物ノ  
感觸引誘ニ因テ、邦國ノ編制、人民ノ性質ニ於テ、各國大

史上ノ紛難

氣候食物地質ノ三者ハ相須テ相用ヲナスヲ論ス

ニ異同ヲ生スル所ノ、要々ナルモノヲ指示セントス、却テ氣候、食物、地質ノ三者ハ相須テ、相用ヲナスモノニシテ、其理更ニ疑ヲ容レサルナリ、今精細ニ之ヲ説明セハ、國土ノ氣候ハ、其國土ニ生殖スル所ノ食物ト、密著シテ分離セザルモノナリ、而シテ其食物ハ、其ノ之ヲ生スル地質ニ由テ、自カラ其感觸ヲ受クルノミナラス、土地ノ高卑大氣ノ模様等、凡ソ地形學中ニ包含セル諸事物ニ由テモ、亦幾多ノ感觸ヲ受クルモノナリ、斯ク、三者相密著シテ、相離レサルノ理、明々ナレハ、今又一々之ヲ論辨セス、唯三者相須テ、相生スル所ノ感効ヲ分テ之ヲ陳述スヘシ、左レハ、三者ノ全局ヲ綜覽スルコト

財貨ノ増殖

ヲ得、且ツ本來分析レ難キ者ヲ強テ分ツノ困難ヲ免レ、併テ矇昧ノ世代ニ於テ、造化ノ權力、人間ノ命運ヲ支配セル所ノ強弱如何ヲ、一層明瞭ニ察知スルコトヲ得ヘキナリ、以上三節ハ人間ハ氣候食物地質及ヒ天造ノ光景ノ四者ニ因テ感觸引誘ヲ受クルヲ論ス、氣候食物地質ノ三者ニ由テ、人民ノ間ニ發生スル所ノ効驗ニ就テ、之ヲ論セハ、財貨ノ増殖ヲ以テ最モ先トス、何トナレハ、富ハ社會ニ於テ多クノ關涉ヲ為セハナリ、蓋シ發達開智ハ財貨ハ増殖ヲ勸ルモノト雖、其始メテ此邦國ハ編制ハルニ當テハ先ツ富ヲ以テ智識ハ前ニ

置かかれへかたス、各人各個貧窮ニ驅馳セラレ、衣食ニ奔走スル間ハ固ヨリ高尚ハ事業ヲ經營スルハ餘暇ヲ得ズ、又其希望ヲ發動セサルナリ、又況ンヤ學藝修習ハ下ニ於テハヤ但シ野蠻人民ノ才力ニ適當シタル所ハ粗且ツ鄙陋ナル器具ヲ製造シ、以テ日用ノ不便ヲ補フニ過キサルナリ、

人間社會ノ景況、此地位ニ在ル時ハ財貨ノ増殖ヲ以テ第一急務ト為サ、ル可ラス、何トナレハ、貨財ヲケレハ、餘暇ヲ得ル能ハス、餘暇ナケレハ、學藝ヲ習練スルヲ能ハサレハナリ、若シ、人民ヲシテ、常ニ其得ル所、其費ス所ニ相均シカラシメハ、更ニ一ノ餘暇ヲ生スルヲナシ、故

ニ財本ヲ貯積シテ以テ耕織セサルノ民ヲ支養スルノ方便ヲ得ズ、若シ、其得ル所、其費ス所ヨリ大ナラシメハ、必ス餘暇ヲ生スヘシ、其餘暇ハ、則普通ノ理ニ由テ自ラ増殖累積シテ、遂ニ耕織セザルノ民ヲ支養スル所ノ財本トナルベシ、是ニ至テ始メテ智慧ヲ練磨スルハ徒カ出シ、昔者衣食ニ貧シク、生計ニ忙シク、學術研究ハ閑暇ヲ得サリシ徒モ、今者此財本ハ為ニ之ニ身ヲ委託スルハ、日月ヲ得ハハナリ、

發達開智ノ一ニ就テ、財貨ノ増殖ノ先務ナルヲハ、前段論述スル如クニシテ、財貨ヲケレハ、智識ヲ得ルヲニ向テ、更ニ希望ヲ生セス、亦餘暇ヲ得サルナリ、矇昧無智ノ世



カ役ノ勤勉  
ト次第造化  
ノ惠ニ因テ  
ノ収獲

代ニ於テハ、富殖ノ迅速ナルヲ只其國土ノ形勢ニ由ル  
ノミ、稍々開明ニ進ミ、少シク貯積ヲ生スルニ至レハ、富  
ヲ致スノ資トナルモノ、亦自カラ多カルヘシ、然ルニ、人  
民此地位ニ進達スルニ先ツテ富ヲ致ス者唯々ニアル  
ノミ、何ッヤ、一ハカ役ノ勤勉ト次第ナリ、一ハ造化ノ惠  
ニ因リカ役ニ報セラレ所ノ収獲ナリ、而メカ役ノ報ハ  
其土地ノ肥潤ニアルナリ、土地ノ肥潤ハ、其地質及ヒ河  
沼等ノ為メニ、其地ノ膏腴ヲ受クルト、大氣ノ濕熱ニ因  
テ起ルモノナリ、カ役ノ勤勉ト次第ハ、全ク氣候ニ屬ス  
ルモノナリ、温和ノ氣候ニ於テハ、勤勉職業ヲ為ス得ト  
雖、暑氣酷烈ナル時ハ、之ヲ勉ムルヲ欲セス、又之ヲ

為スヲ能ハサルナリ、且ツ氣候ハ役夫ヲ獎勵シ、或ハ怠  
惰ヲムルノミナラス、又其慣例ノ整齊ヲ造リ成スモノ  
ナリ、北方僻地ニ住スル人民ハ、温帯ノ地ニ住スル人民  
ノ如ク、確乎不撓ノ勤勉ヲ為スヲ能ハス、今其証ヲ舉レ  
ハ、北極圈内ニ於テハ、天氣ノ沍寒ナルト、或ル時節ニ於  
テ、日光ノ稀薄ナルトヲ以テ、常ニ戶外ニ在テ、職業ヲ為  
スヲ得セシメス、是ニ由テ終ニ勤勉ノ慣例ヲ破壊シ、  
惰怠ノ惡習ニ陥ラシム、是ヨリシテ寒地ノ人民ハ、氣候  
温和ニシテ間斷ナク、職業ヲ為ス所ノ人民ニ具備シタ  
ル性質ト相反シ、翻覆不定ノ性質ヲ鑄成スルニ至レリ、  
又同一理ニシテ、他ノ反對ノ形情ニ於テ此効驗ヲ照會

四國相通ス  
ル所 弊害

スルニ足ルモノアリ 瑞典 諾威 及 西班牙 葡萄牙 其政  
 令憲法法教及ヒ、風俗ニ於テ、其異同アルヲ實ニ甚シト  
 ス、然ルニ、此四國ニ相通スル所ノ弊害アリ、此四國ノ民  
 ハ、皆永ク耕作ノ業ニ耐ユルヲ能ハス、西班牙 葡萄牙  
 二國ニ於テハ、暑氣ノ酷烈ナルト、天氣ノ乾燥ナルニ由  
 テ、地質亦瘠薄、豐饒ナラス、常ニ農業ヲ阻攔セリ、又瑞典  
 諾威ノ二國ニ於テハ、冬天寒氣ノ嚴烈ナルト、日影ノ短  
 縮ナルトニ由テ、亦同一ノ碍礙ヲ為セリ、其氣候寒暑ノ  
 異ナルハ、斯ノ如ク相表裏スルト雖モ、其人民ノ性質ニ  
 至テハ、皆怠惰ニシテ、剽輕不定ナリ、之ヲ氣候温和ノ地  
 ニ住シ、阻隔ナク、間斷ナク、永ク職業ヲ取ルヲ得ル人



地質氣候

亞細亞ノ開  
化ハ地質ニ

民ノ風俗ニ比スレハ、四國皆共ニ相背反シテ、亦俱ニ同  
 一ノ形情ヲ顯セリ、  
 是等ハ則富ノ創製造化ノ權力ニ因テ、制セラル、所ノ  
 大原因ナリ、而ノ人事稍々開明ノ域ニ進メハ、之ト同一  
 ノ功用ヲ為シ、或ハ之ニ超過スルモノアリト雖モ、然ル  
 ニ是レ、後代ノ事ニシテ、矇昧不開ノ世ニ於テハ、富殖ヲ  
 為ス者ハ、唯ク地質氣候ノ二ツナリ、蓋シ地質ハ動作ニ  
 報スルハ果テ存シ氣候ハ動作ハ勢カト次第ヲ補助ス  
 ルモハナリ、古今何レノ國ニ論ナク、此二者ノ中、其一ヲ  
 欠キ、能ク開化ノ域ニ進入シタルモノ、未タ曾テアラサ  
 ルナリ、亞細亞洲ニ於テハ開化ハ常ニ肥潤ノ地ニ

在リ

限レリ、此地ハ即チ南方支那ノ東ヨリ、僅少ノ阻斷アリ  
 テ、小亞細亞、邊耳志耶及ヒ、巴連斯多因ノ西岸ニ達セリ  
 此大帶ノ北ニ接シテ、長延瘠薄ノ地アリ、其民ハ牧羊流  
 移ノ蠻族ニシテ、其地ノ肥潤ナラサル為メニ、常ニ窮乏  
 ニ圍繞セラレ、此土ニ住スル時間ハ決シテ野蠻ノ習俗  
 ヲ脱スルヲ能ハス、然ルニ異別ノ時代ニ於テ、其蒙古人  
 民及ヒ、韃靼人民ノ、支那、印度及ヒ、百兒西亞出テ、大國ヲ  
 創建シ、其富殖ヲ致シ、古代ノ開化ヲ粧飾セシヲ觀レハ  
 其本土ニ於テ、矇昧不開ヲ脱シ得サルハ、全ク其國土ノ  
 瘠薄ニ在テ、其種族ニ因ラサルヲ甚ク明了ナリ、何トナ  
 レハ、南方亞細亞ノ曠原ニ於テハ、造化ノ力ニ因テ、富殖

ノ物料ヲ充備セルヲ以テ、蠻族始メテ改良ノ点ニ衝突  
 シ、曾テ其本土ニ於テ得サリシ所ハ、文學ヲ練成シ、政度ヲ  
 編制スルヲ得レハナリ、又是ト同形情ニシテ、亞刺比  
亞人ハ、其本土ニ在テ、矇昧不開ナルハ、全ク其土ノ乾燥  
 ナルニ在テ、其不開ハ即チ其窮乏ノ致ス所ナリ、然ルニ  
 其以六百年代ニ於テ、百兒西亞征服シ、又七百年代ニ於  
 テ、西班牙ノ沃地ヲ掠奪シ、又八百年代ニ於テ、本尚武ヲ  
 取リ、終ニ殆ント印度ノ全部ヲ平ケ、忽チ此新地ニ來住  
 スルヤ、人氣直ニ大ニ變換シ、昨者ハ其本土ニ在テ、不文  
 不開ハ民カハシ者、今者始メテ財貨ヲ貯積スルニ至リ  
 ハ、昨者其本土ニ於テ、牧羊流移ハ蠻族カハシ者、今者開

化ハ工藝技術ヲ練磨スル者トナレ、昨者天幕ニ於テ  
 坐卧シ砂場ニ於テ飲食セシ者、今者重大ナル邦國ヲ建  
 立シ美麗ナル城邑ヲ造成シ宏壯ナル學校及ヒ書庫ヲ  
 開カニ及ベリ、此遺跡ノ如キハ、摩爾杜啞、馬虞獄吐、及ヒ  
 傳利比ニ於テ今尚ホ之ヲ見ルヘシ、又茲ニ一大砂漠ア  
 リ、只北ハ紅海ノ一衣帶水ヲ隔テ亞刺比亞ニ對シ同緯  
 度ニ於テ、亞弗利加全部ヲ蓋蔽シテ、大西洋ノ海岸ニ達  
 スルマテ、西方ニ向テ伸張セリ、此地ハ、即チ亞刺比亞ト  
 同シク瘠薄ノ曠野ナルヲ以テ、此地ノ住民ハ、亦亞刺  
 比亞ト同シク富殖ノ法ヲ得ス、常ニ不文ニシテ、開化ノ  
 俗ニ化スト能ハス、然ルニ、此大砂漠ノ東部ハ、那以爾河

埃及開ノ中  
 心

ニ灌溉セラレ、此水ノ往々溢レテ膏腴ノ泥土ヲ輸ヒ、此  
 砂場ヲ被覆スル為メニ、自カラ力役ニ非常ノ果報ヲ與  
 ヘリ、是ヲ以テ、砂漠中、獨リ此地方ニ限り、財貨速カニ増  
 殖シ、學藝ノ習練モ亦隨テ進歩セリ、故ニ此一班小地、埃  
 及開化ノ中心トナリタリ、此開化ニ就テハ、後世ニ至リ  
 浮大附會ノ説ヲ為スト雖、無智矇昧ノ病根タル卑賤  
 貧乏ノ境界ヲ脱出シテ、開化ノ域ニ進達スルヲ能ハサ  
 ル、亞弗利加洲中、其他諸國ノ蠻族ニ比スレハ、豈ニ讚賞  
 スヘキ者ナラスヤ  
 是ニ由テ此ヲ觀レハ、開化ノ二原因ナル地質氣候ノ中  
 昔時ハ土地ノ肥潤最モ勢力アリシト昭々タリ、然レモ

歐羅巴ノ開  
化ハ氣候ニ  
關ス

亞細亞開化  
ノ功績ハ上  
地ト產物即  
チ外物ト外  
物ナリ歐羅  
巴ハ氣候ト  
力役即外物  
ト人間ナリ

只歐羅巴ノ開化ニ於テハ氣候最モ強大ノ勢力ヲナセ  
リ。前段ニ於テ論述セシ如ク氣候ハ役夫ノ勤惰ヲ制シ  
又次第ト不次第ノ慣例ヲ造リ出スモノナリ斯ク成果  
ノ異ナルハ則チ其原因ノ異ナルヲ以テナリ亞細亞亞  
弗利加ニ於テハ富ノ増殖ヲ為シタル者ハ其土地ノ肥  
潤以テ產物ノ收穫ヲ得セシムルニ在リ歐羅巴ニ於テ  
ハ氣候ノ温和以テ力役ノ勤勉ト次第ヲ妨タケサルニ  
在リ故ニ亞細亞亞弗利加ニ於テ開化ノ功績ハ兩ナカ  
ラ外物ナリ歐羅巴ニ於テ其功績ハ即チ外物ト人カナ  
リ是ヲ以テ亞細亞亞弗利加ノ開化ハ混雜ヲ生スル  
甚タ少ナク隨ツテ事物實際ニ行ハル、ト最モ速カナ

真正開化ハ  
人ニ在リ

リ故ニ其開化ノ先後ヲ論スレハ亞細亞亞弗利加ノ肥  
潤ナル地方ハ必ス其先ニ在リ然ルニ其開化ハ至善ノ  
開化ニアラス又永久ニ耐フヘキ開化ニアラサルナリ  
夫レ余カ所謂真正ノ開化ハ造化ノ惠ニ由ラスシテ人間  
ノ勉強ニ由ルモノナリ故ニ當初氣候ニ由テ開ケタル  
歐洲ノ開化ハ地質ニ由テ開ケタル開化ノ及ハサル盛  
大ノ進歩ヲ為セリ蓋シ造化ノ力ハ其外貌甚タ勢力ア  
ルニ似タレ氏其勢力限り在テ増進セサルモノナリ若  
シ果シテ然ラサルモ吾人未タ曾テ造化ノ勢力ノ増進  
シタル証ヲ見ス又其ノ増進スヘキ理論ノ徴可ヲ見サ  
ルナリ然ルニ人間ハ勢カハ之ヲ試驗ニ徴シ之ヲ理論

ニ推スニ其勢力限リナク上進スルモハナリ且ツ人間ハ智カニ區域アルハ証ヲ見サルナリ又心思ハ智巧ヲ長スル勢カハ獨リ人間ハ專ラニ有スル所ナリ故ニ氣候ハ公ヲシテカ役ヲ勵マシ富ヲ致サシムルハ深キハ土地ハ肥潤人ヲシテ勞セシテ多ク物産ハ採獲ヲ得セシム自カラ富殖ヲ致スハ幸福ニ比スレハ其進歩ハ功又偉大ナリト云フヘシ

以上五節ハ財貨ノ増殖ニ於テ氣候食物地質三者ノ功用ヲ論ス、

氣候ト地質ト其富殖ヲ致スニ差異アルヲ斯ノ如ク然ルニ又茲ニ論スヘキ緊要ノ一事アリ富殖既ニ成ルノ

財貨ノ分布  
財貨ノ増殖  
ト同ク造化  
ノ支配ヲ免  
レヌ

後其富ノ分布如何ナリ即チ貴豪ノ者其幾何ヲ其手ニ占ム卑賤ノ者其幾何ヲ其手ニ占ムルノ如何ナリ扱テ人事開進ニ至レハ此分布ニ就テ大混雜ヲ生スル所ノ種々ノ事情アリト雖氏之ヲ論究スルハ此編ノ主意ニアラサレハ姑ラク舍テ之ヲ論セス唯々矇昧不開ノ世代ニ就テ之ヲ論セハ其分布全ク造化ノ法制ニ支配セラル、一富ノ増殖ト亦同一理ナリ且又此法制ハ非常ノ勢力アルモノニシテ往々地球上最善ノ地ニ住スル人民ヲシテ永世脱却スヘカラサルノ窮阨ニ陥ラシムルモノアリ今若シ此ノ如キ理ヲ了解セハ亦此分布法ノ至大至要ナルヲ發明スヘシ何トナレハ富ハ權カ

富ハ権カノ原因

才智ノ民腕カノ民即チ傭主傭夫

役夫司令者及財主

ハ原因ニシテ富ハ歸スル所即チ權カハ歸スル所ナリ故ニ富ハ歸スル所ヲ吟味セハ併テ權カハ歸スル所ヲ看出シ文明各國史乘政度ハ上ニ於テ讀書ハ眼光ヲ發輝シ權カ分争ハ事ニ於テ其形情ヲ逃サハルヘシ此法ノ通例ヲ以テ之ヲ論セハ一旦財貨貯積ノ後ハ其財貨ハ力役スル民ト力役セザル民ノ中間ニ分布ス而シテカ役セザルノ民ハ其才智カ役スル民ニ優越シカ役スルノ民ハ其員數カ役セザル民ニ超過スヘシ是ニ於テ其才智優等ノ民ハ其腕カ強壯ナル下等ノ民ヲ指揮シ彼我共ニ支給スル所ノ財本ヲ造り出サシム而シ此役夫ノ勞報ヲ賃錢ト云ヒ司令者ノ應報ヲ利益ト云ス

稍々開明ニ進ムニ及ンテ又別ニ財主ト名クル所ノ者ヲ出セリ此財主ハ其業ヲ支配セス又勞役ヲ為サス已レノ蓄積ヲ司令者ニ借與シ其貸金ノ報酬トシテ司令者ニ屬スル所ノ利益ノ一部ヲ受クル者ナリ之ヲ名ケテ貸金ノ利子ト云フ然レモ利子利益及賃錢ノ三稱ハ財貨大ニ其分量ヲ増シ整齊廣ク流通スルニアラサレハ起ラサルナリ是レ便チ後世ノ事ニシテ余輩今論述スル所ノ如キ未開ノ地位ニ於テハ財主ハ一種ノ分類ニ置クニ足ラス故ニ此時代ニ在テハ唯ク傭主ト傭夫ノ間ニ分布スル所ノ財貨ノ配額ヲ支配スル造化ノ法制ヲ論究スルヲ以テ餘アリトス

夫レ賃錢ハ、力役ニ報スル所ノ價直ナレハ、其昇降ハ、總テ他ノ貨物ノ價直ト、一樣ニ需要者ノ多少ニ由テ變セサルヘカラス、用ヲ望ム者多クシテ、之ヲ求ムル者少クシテ、之ヲケレハ、賃錢必ス下落スヘシ、之ヲ望ム者少クシテ、之ヲ求ムル者多クシテ、賃錢必ス上騰スベシ、今假リニ其國ニ於テ傭主ト傭夫ノ間ニ分布スヘキ其ノ財貨アリト定ムルトキハ、役夫ノ員數増加スル毎ニ、其賃錢ハ必ス減少セサルヘカラス、故ニ他ノ事故ヲシテ、此常理ヲ攪擾スルコトナカラシメハ、賃錢ノ昇降ヲ以テ人口ノ増減ヲ判斷シ得ヘシ、何トナレハ、賃錢ノ總額ハ、資本ノ巨大ニ因ルト雖、用途ノ増加スルニ隨テ、自カラ資本モ亦

賃錢ノ昇降ヲ以テ人口ノ増減ヲ判斷シ得ヘシ

役夫ノ増加ハ食物ノ増殖ニアリ

増加スルニアラザレハ、賃錢ノ總計ハ、請求者ノ増スニ隨テ減少スルヲ常例トスレハナリ、賃錢資本ノ増加ニ就テ、最モ有益ナル事ヲ知ルハ、重大事件ナレ、民之ヲ論スルハ、此間ノ急務ニアラス、目今論述スヘキハ、財貨ノ増殖ニアラスシテ、財貨ノ分布ニアルナリ、故ニ其目的トスル所ハ、人口ノ増殖ヲ速ニスルヨリ、忽チ役夫ノ有餘ヲ生シ、遂ニ賃錢ノ平均價格常ニ甚タニキ低度ニ沈滞スル所ノ造化ノ規則ヲ辨明スルニアルナリ、身外事物ノ中、役夫ノ増加ニ最モ大勢カアル者ハ、食物ノ増殖ナリ、茲ニ二箇ノ國アリ、總テ他ノ事故ニ於テハ



更ニ相異ナルヲナント雖、唯夕食物ニ於テ大ニ異ナル所アリテ、甲ノ國ハ食物豐饒ニシテ、其價亦廉ナリ、乙ノ國ハ食物歉乏ニシテ、其價乃チ貴ケレハ、甲國ノ人口必ス、乙國ノ人口ヨリモ速カニ増殖スヘシ、而シテ其賃錢ハ平均價格必ス低カルヘシ、何トナレハ、甲國ノ役夫ヲ生スル、乙國ヨリモ多キヲ以テサリ、固ヨリ食物ハ造化ノ法制ニ支配セラレハ、者ナレハ、之ヲ吟味穿鑿スルハ、則、余輩現今ノ目的ニ於テ、最モ切要ナル事トス、幸ニ近者、化學及ヒ動植物學兩ナカラ大ニ進ミ大ニ開ケタレハ、之ヲ細密ニ探リ、確實ニ決定スヘキ一方術アリ、人間ノ食物中、其生命ヲ維持スルニ緊要ナル性質ヲ具

食物ノ差別

アルモノ、唯夕二箇アリ、其一ハ動物熱ヲ醸成シテ、身軀ノ活潑ヲ保持スルモノナリ、其一ハ絶エス體中ノ機關ニ生スル所ノ損耗ヲ修復スルモノナリ、斯ク其用途ノ異別アルニ由リテ、其食物ニモ亦自カラ差別アリ、人體ノ溫度ヲ整理スルモノヲ不含窒素物ト云ヒ、體中機關ノ損耗ヲ修復スルモノヲ含窒素物ト云フ、抑モ吾人ノ食セシ所ノ窒素ヲ含マサル食物中ノ炭素、吾人吸入セシ所ノ空氣中ノ酸素ト、體中ニ於テ相結合シ、忽チ焚燃ノ勢ヲ起シ、其動作ニ由テ、人體ノ溫度ヲ整理セラル、ナリ、而シテ窒素ハ、元ト酸素ト親和ノ力甚ク微弱ナルモノナレハ、窒素ヲ含ム所ノ食物彼ノ酸炭焚燃ノ勢ヲ防

歴々以テ纖維筋骨ヲ修復シ、體中機關ノ損耗ヲ補助シ、  
 其職務ヲ完フスルナリ、  
 氣候ノ異別ニ由テ、食物ヲ消費スルノ亦差別アルモノ  
 ナリ、熱國ニ住スル民ハ、寒國ニ住スル民ヨリモ動物熱  
 ヲ保存シ易シ、故ニ室素ヲ含マサル食物ヲ食フノ少量  
 ニシテ足ルヘシ、固ヨリ室素ヲ含マサル食物ノ功ハ、人  
 體ノ溫度ヲ其ノ度ニ保持スルニアリ、是レト同理ニシ  
 テ、熱國ニ住スル民ハ、室素ヲ含メル食物ヲ食フノ少量  
 ニシテ足ルヘシ、何トナレハ、身體ヲ勞動スルノ少ナキ  
 ヲ以テナリ、乃チ纖維筋骨ノ損耗甚ク速カナラサルニ  
 因テナリ

少消費多  
 生産ニ同シ

是故ニ熱國ニ住スル人民ハ、寒國ニ住スル人民ヨリモ  
 其食物ヲ食フノ少ナシ、是等ノ關係ヲ以テ他事總テ同  
 一ナルキハ、熱國人口ノ増殖常ニ寒國ヨリ速カナルハ、  
 又自然ノ勢ナリ、實地ニ於テ食物ノ豊饒ナルハ、其生産  
 ノ多キヨリ起ルト、其消費ノ少ナキヨリ起ルト、到底同  
 一ニシテ相異ナルトナシ、何トナレハ、食物ヲ費スノ少  
 ナケレハ、其食物ノ量同シキモ、人ヲ支養スルノ長ケレ  
 ハナリ、故ニ今食物ハ量同一豊饒ナラシムハ多クハ  
 消費ヲ要スル人民ハ、少ナキ消費ヲ要スル人民ニ比ス  
 ハ、必ス其數乏ヲ生スルモハナリ、是レ熱國人口ハ増  
 殖自カラ寒國人口ハ増殖ヨリ速カナル所以ナリ、

是レハ、氣候ノ法人口ノ法ト相連結シ、又財貨分布ノ法ト相連結スル所以ヲ論セリ、茲ニ又一段ノ論アリ、此ハ大ニ前論ヲ確固ナラシムルニ足ルモノナリ、備テ寒國ニ住スル人民ハ、熱國ニ住スル人民ヨリ、多クノ食物ヲ食フノミナラス、其食物ノ價直亦甚ク貴シ、其價ノ貴キ所以ハ、其食ヲ得ルノ難クシテ勞ヲ費スノ多クレバナリ、今切要ナル所ヲ撮テ、短簡ニ此事ヲ陳述スヘシ、前文既ニ論述セシ如ク、食物ノ主意ハ、身體ノ溫度ヲ保持スルト、織緯筋骨ノ損耗ヲ修復スルノニツニアリ、其一ハ吾人ノ吸入セシ所ノ空氣中ノ酸素、身體中ヲ循環スル間、吾人ノ食セシ所ノ食物中ノ炭素ト、相結合スル

モノナリ、此酸素ト炭素ノ抱合ハ、大ニ熱ヲ發スルニアラサレハ能ハス、是レ人體常ニ其必要ナル溫度ヲ保存スル所以ナリ、抑モ炭素ト酸素ノ結合ハ其量一定ノ比例アリテ、其當ヲ得ルニアラサレハ、相結合スルトナシ、故ニ其當ヲ得ルニハ、炭素ヲ含メル食物ノ量、吾人ノ吸入スル所ノ酸素ノ量ニ隨テ變セサルヘカラス、若シ身外ノ寒氣一層ヲ加ヘ、吾人體内ノ溫度ヲシテ下落セシムル所ハ、此二箇共ニ其分量ヲ増サ、ルヘカラス、是故ニ氣候極寒ノ國ニ住スル人民ハ、炭素極メテ多キ所ノ食物ヲ食セサルヘカラス、其原因ニアリ、其一ハ氣候極寒ノ地ニ於テハ、空氣濃厚ナルヲ以テ、彼ノ氣候炎熱ノ

為メニ空氣粗薄ナル地ニ於テ吸入スルヨリモ呼吸每ニ酸素ノ多量ヲ吸入スルナリ、其二ハ寒氣ハ人ヲシテ其呼吸ヲ速カニスルヲ以テ、寒國ノ人民ハ、熱國ノ人民ヨリ呼吸速カニシテ、酸素ノ多量ヲ吸入スルナリ、是ヲ以テ寒國ノ人民ハ、酸素ヲ費スル多シ、故ニ炭素ヲ費スルモ亦多カラサルヲ得ス、蓋シ人體ノ溫度ヲ保存シ、纖維筋骨ノ平均ヲ得ルハ、唯タ此二元素親和ノ度ヲ得テ、相結合スルニ由レハナリ

斯ク化學動植學ノ理ヲ以テ、推論スルハ、其人民ノ住スル地方、寒氣愈々甚タシケレハ、炭素ヲ含メル食物ヲ要スルト愈々多カルヘシ、此ハ學問上ノ論理トレト、之

ヲ實際ニ徴スルニ、果シテ然ルモノアリ、兩極圈内ニ住スル人民ハ、鯨油鯨脂ノ多量ヲ食ス、然ルニ熱帶地方ニ住スル人民ヲシテ、此ノ如キ食物ヲ食ハシメハ、立地ニ其命ヲ失フヘシ、是故ニ熱帶ノ地ニ住スル人民ノ常食ハ、大概菓實米穀其他ノ植物ノミ、兩極圈内ノ食物ニ於テハ、炭素最モ多ク、熱帶ノ食物ニ於テハ、酸素最モ多シ、是レ分析術ニ由テ、明定スルヲ得ヘシ、凡ソ油脂ハ、炭素ヲ含ムト菓實ヨリ大抵六倍ニシテ、酸素ヲ含ムト甚タ少ナシ、又植物中最モ滋養物ナル糊分ハ、酸素ヲ具フルト殆ント其半ニ在リト云フ、

炭素多キ食物ハ、炭素少ナキ食物ヨリ、其價直必ス貴シ、

何トナレハ、炭素多キ食物ハ植物ノ如ク自然ニ土地ヨ  
 リ生セス、必スヤ猛烈ナル動物ノ脂膏及ヒ油液ヨリ得  
 ルモノナレハ、之ヲ得ルニ大危難ヲ犯シ、大辛苦ヲ盡  
 ルヘカラス、然ルニ酸素多キ食物、即チ菓實ハ、造化ノ  
 恩惠ニ由テ、甚タ多ク、甚タ獲易ク、之ヲ得ルニ、更ニ危難  
 ヲ犯ス、トヲ用井ス、又辛苦ヲ盡ス、トヲ要セス、是等ノ比  
 較ハ、得ルニ難キ者ト、得ルニ易キ者トノ極度ヲ舉ルモ  
 ノト雖、實地兩極ニ近クニ隨ヒ、益々此差異ノ甚タシ  
 キヲ見ルニ至ルヘシ、故ニ國土愈々寒ケレハ愈々炭素  
 多キ食物ヲ要シ、國土愈々熱スレハ愈々酸素多キ食物  
 ヲ要ス、然ルニ、炭素ヲ含メル食物ハ、多ク動物ヨリ得ル

ヲ以テ、酸素ヲ含メル食物ニ比スレハ、之ヲ得ルト甚タ  
 難シトス、是故ニ炭素ヲ含メル食物ヲ要スル所ノ寒國  
 ノ住民ハ、酸素ヲ含メル食物ヲ要スル熱國ノ住民ニ比  
 スレハ、其矇昧ノ世代ヨリ、氣質自カラ勇敢ニシテ、且ツ  
 大膽ナリ、斯ク其太初此差異アルヲ以テ、後日ニ至リ、大  
 ニ其成績ヲ異ニスルニ至レリ、今之ヲ辨論スルハ、此段  
 ノ主意ニアラス、此段ハ唯々、食物ノ差異財貨ノ分布ヲ  
 支配スル如何ヲ論スルノミ  
 財貨ノ分布ニ不平均ヲ生スル所以ハ、前既ニ論述セレ  
 如ク明瞭ナレ、重テ茲ニ此議論ノ要領ヲ説明スルモ  
 亦無益ニアラサルヘシ、抑モ貨錢ノ時價ハ人口ト共ニ

賃錢ハ人口  
ト左右シ人  
口ハ食物ト  
左右ス

左右スルモノナリ、役夫ノ數少ナケレハ、賃錢必ス上騰  
シ、役夫ノ數多ケレハ、賃錢必ス下落スヘシ、尚ホ此他人  
口ノ増減ニ關係スルモノ多シト雖モ、人口ハ必ス食物  
ト共ニ左右スルモノナリ、食物多ケレハ、人口増殖シ、食  
物少ナケレハ、人口停止シ、或ハ減少ス、而シテ寒國ニ於テ  
ハ、熱國ニ於ケルヨリモ、生命ヲ維持スルニ必要ナル食  
物歉乏ナリ、但タ歉乏ナルノミナラス、之ヲ食フコト多シ  
是ヲ以テ人口ノ増殖甚ク速カトラサルナリ、今結末ニ  
望ムテ更ニ最モ短簡ニ之ヲ論決スルニ、熱國ニ於テハ  
賃錢常ニ下落セシトスルハ、景況ヲ顯シ寒國ニ於テハ  
賃錢常ニ上騰セシトスルハ、景況ヲ顯セリ

亞細亞亞弗  
利加及ヒ亞  
米利加ノ開  
化皆熱地ニ  
起リ獨リ歐  
羅巴ノ開化  
ハ寒地ニ發  
ス

以上十三節ハ、財貨ノ分布ニ於テ、氣候、食物、地貨、三者  
ノ功用ヲ論ス、  
今此大道理ヲ實際ニ徵スルニ、曾テ其差ヲ見ス、皆符節  
ヲ合セシ如シ、亞細亞、亞弗利加、及ヒ亞米利加、ニ於テ昔  
時ノ開化ハ悉ク熱地ニ起レリ、故ニ其賃錢ノ價直甚ク  
低下ナリ、隨テ役夫ノ困窮實ニ見ルニ忍ヒサルモノア  
リ、唯タ歐羅巴ニ於テノ開化ハ始メテ寒冷ノ地ニ起レ  
リ、故ヲ以テ力役ノ報甚ク貴シ、隨テ財貨ノ分布モ食物  
豊饒ニシテ人口繁殖ノ諸洲ニ於テ得ヘカラサル所ノ  
平均ヲ得タリ、此差異則チ民間、及ヒ政治上ニ於テ大關  
係ヲ惹起セシモノナリ、今之ヲ講究セント欲スルニ際

シテ、我歐洲ニ於テ他洲一般ノ成績ヲ成スモノアルヲ  
 看出セリ、是レ直ニ其ノ普通ノ法ヲ証スルニ足ル一例  
 ナレハ、宜シク先ツ茲ニ之ヲ論述スヘシ、歐洲ニ於テ食  
 物極廉ナル一國アリ、即チ愛倫ナリ、愛倫ニ於テハ千五  
 百年代ノ末、或ハ千六百年代ノ初ニ、アイラント馬鈴署始メテ其地  
 ニ輸入セリ、其輸入以來二百餘年ノ間、役夫ハ皆之ヲ常  
 食トセリ、馬鈴署ハ其同一ノ滋養ヲ有スル他ノ食物ニ  
 比スレハ、其價極メテ廉ナリ、近來其物ニ病ヲ生シ稍々  
 其價ヲ増スト雖、凡尚ホ低價ト云フヘシ、今又繁殖ノ力  
 ト、養物ノ分量トニ就テ之ヲ參考スルニ、通例ノ地一埃  
加餘ニ當ルサ四歩ニ、馬鈴署ヲ種ユル片ハ、小麥ヲ種ユル

ヨリモ、二倍ノ人員ヲ支養スヘシ、故ニ馬鈴署ヲ常食ト  
 スル國ハ、其人口ノ増加スルト、小麥ヲ常食トスル國ヨ  
 リ一倍スルノ理ナリ、之ヲ實地ニ徵スルニ、果シテ差ハ  
 サルナリ、二三年前疫癘ト移住ノ為メニ其國事ノ面目  
 ヲ變換セシマテハ、愛倫ノ人口ノ全數ヲ計算スルニ、年  
 ヲ百分ノ三ヲ増加セリ、其同時間ニ於テ、英倫英倫ノ人口ハ  
 唯々百分ノ一半ヲ増スノ、此二國ニ於テ財貨ノ分布  
 全ク相異ナルハ、乃チ是カ為メナリ、英倫ト雖、凡其人口  
 ノ増加稍々速カニ過キ、役夫ノ員數自然夥多ニ及ヒ、隨  
 テ力役ノ徒其勞動ヲ償フ為メニ、充分ノ報ヲ得ルト能  
 ハス、然レ凡其情態一二年前ノ愛倫人ニ比セハ頗ル奢

侈榮華ト稱スヘシ、抑モ愛倫人ノ窮阨ニ陥リ其安樂ヲ失フノミナラス開化人民通常一般ノ生計ヲ得ルヲ能ハサルハ管轄者ノ迂濶ト近年マテ英國ノ名譽ノ汚點ナル虐政ニ由ルト雖凡其大原因ハ全ク貨錢ノ賤シキニ在リ而シテ其禍ハ天然食物ノ豐饒ニシテ其價直ノ廉ナルヨリ人口ノ増殖ヲ速カニシ、役夫ノ員數ヲ増加スルニ根スルナリ、二十年前愛倫ノ貧富ヲ視察スル為メニ、其國ニ遊歴シタル、インダスト云ヘル者アリ、其言ニ當時役夫ハ貨錢一日僅カニ四邊<sup>一</sup>厄<sup>二</sup>幾<sup>三</sup>餘<sup>四</sup>當<sup>五</sup>ニ過<sup>六</sup>ス、且ハ其凄慘些少ナル貨錢ト雖凡日々其職事アルヲ恃ムニ足ラズト以テ明カニ愛倫人ハ窮阨ヲ察知スヘシ

貨錢低下  
ルトキハ財  
貨ノ分布宜  
シカラス乃  
チ政權民權  
亦從テ宜シ  
キヲ得ス

愛倫ハ歐羅巴洲中ニ於テ其他各國ヨリモ天然ノ扶助  
洪大ナルヲ以テ食物自カラ卑陋之レカ為メニ其禍害  
ヲ受クルト斯ノ如シ而シテ今廣ク各洲各國民間ノ情態  
ヲ探討スルニ何レノ國ト雖凡實地ニ於テ此理ニ外ナ  
ルモノナシ、故ニ他事總テ同一ナルハ食物ハ人口ノ  
増殖ヲ判シ人口ノ増殖ハ貨錢ノ價直ヲ判斷スルヲ發  
見スヘシ、且又貨錢常ニ低下ナレハ財貨ノ分布甚ク不  
平均ナルニ由リ、政權及民權ノ分布モ亦甚ク不平均ナ  
ルトヲ看出スヘシ、今言辭ヲ轉シテ之ヲ云ヘハ、貴賤上  
下ノ關係モ既ニ揭示シタル天然異別ノ上ニ屬スルヲ  
見ルニ至ルヘシ、總テ是等ノ事ヲ一團トシテ見ルハ



ハ造化、人事、其間相親密ナル接合、及ヒ其接合ヲ支配スル所ノ造化ノ法制及ヒ昔時ノ開化ハ、其ノ度ニ達スレトモ、其後、其進步ヲ阻攔スル所ノ身外萬種ノ障礙ヲ壓倒スルヲ得スシテ、遂ニ屈滯スル所以ノ理ヲ明亮ニ了解スルヲ得ヘレ、

以上二節ハ、愛倫ヲ以テ例トシ前論ヲ証ス、

先ツ眼光ヲ亞細亞ニ注テ、之ヲ見ルニ於テ、内外現象ノ衝突ト名クル所ノ者ヲ説明スルニ好例アリ、既己ニ記載ヒシ如ク亞細亞ノ開化ハ、富有ノ地ニノミ限レリ、而シテ其地ハ極大ノ帶ヲ以テ坤輿上最モ膏腴ノ地ヲ占盡セリ、其内溫度斯坦ハ、最モ永久ノ年間至盛ノ開化ヲ現

セシ地ナリ、又印度ハ、亞細亞洲中、其他諸國ヨリ陳述スヘキ事蹟衆多ナレハ、今其ノ歴史ヲ以テ之ヲ証トシ前

既ニ經濟化學乃動植學ヲ舉テ講明セシ所ノ者ト照考セシメ、益余ガ言論ノ確實信用スヘキ所ヲ説示セントス

却説印度ハ、氣候炎熱ナルヲ以テ、常食ハ必ス酸素ヲ含メル者ヲ用井テ、炭素ヲ含メル者ヲ用井ス、故ニ其食ハ

動物ニアラスシテ、必ス植物ニアリ、然ルニ其炎熱甚タシキヲ以テ、人皆辛苦ノ事業ニ堪ユルヲ能ハス、因テ天

然恩惠ノ最モ多クシテ、其分量ニ比スレハ、其滋養ノ多ク今ヲ含ム所ノ食物ヲ要用トス、而シテ今其常食ヲ檢スル

ニ、果シテ其種類ノモノニシテ、太古ヨリ印度ニ於テ、常

米

食トシテ大ニ行ハル、モノヲ看出セリ、即チ米ナリ、米ハ穀物中最モ滋養ノ性ヲ有シ糊ヲ含ム、最モ多量ナリ、且ツ之ヲ種ユルキハ、少ナクトモ、六十倍ノ報酬ヲ得ルモノナリ、

是故ニ、造化一二ノ法ヲ以テ推スニ、其ノ國常食ノ何物ナルコトヲ察知スレハ、又是カ為メニ、後來ノ事ヲ先知スルヲ得ヘシ、此半島ノ南ニ於テ、米ハ、昔時ノ如ク盛ニ用井ラレズト雖、動物ヲ用井ス、到底「ラジ」ト名クル穀物ヲ用ウルハ、豈好証ニシテ奇ナラスヤ、本来、米ハ、前ニ記載シタル事情ニ適スルヲ以テ、亞細亞洲中熱國ニ於テ、大抵古今普通ノ食物タリ、蓋シ地球上其他諸國ハ此地

方ヨリ移植セシモノナリ、

印度ハ是ノ如ク、氣候及食物ニ一種特別ノ原因アルヲ以テ、財貨ノ分布モ亦甚ク不平均ヲ生セリ、此不平均ハ役夫過多ノ國ニ於テ必ス免カルヘカラサル所ノ通弊ナリ、抑テ今ヲ去ル一二三千年以前ハ舊記ヲ檢スルニ、印度當時ハ事情大抵今日ハ相異ナルトナシ、上等ハ者ハ非常ハ富有ニ安シ、下等ハ者ハ常ニ窮困ニ苦マリ、勞動ヲ致シ、財貨ヲ造リ出ス徒ハ、其僅少ハ分ヲ受ケ、其剩餘ハ租稅及利益トシテ、高貴ハ為ニ之ヲ占有セラレリ、抑モ才智ニ亞テ最モ權カアルモノハ財貨ナリ、財貨ハ平均ナラサルヨリ、民權及政權ノ不平均ヲ生スル

民權及政權

ハ亦止ムヲ得サルノ勢ナリ。是故ニ印度ニ於テハ古代ヨリ人民ノ過半ハ極困極窮ニシテ、手以テ直ニ口ニ達シ僅カニ其生ヲ營ミ常ニ患難ニ圍繞セラレ、更ニ氣力アルヲナク、唯々長上ハ前ニ俯伏シ、且ツ己レ自カラ奴隷トナルニアラサレハ人ヲ捕ヘテ己カ奴隷トナスヘキ、殺伐不仁ノ戰ニ驅役セラレ、終年此賤辱ニ苦シミ、其生ヲ終レハ、豈又首ヲ貴重ハ權義ニ回シ、長上ニ抗スルハ暇アラシヤ、是レ財貨今布ノ不平均ヨリ生シ来ル所ニシテ、又怪ムニ足ラサルナリ。

印度ニ於テハ、産物ノ時價頻リニ變動スルヨリ貨弊ノ位絶ヘス昇降アルヲ以テ、貨錢ノ平均價格ヲ確定スル

財貨ノ四種

貨錢ハ租稅ノ利益及利子ノ剩餘

丁能ハサルナリ、然レ氏目今ノ考察ニ備フルニハ、貨錢ノ例証ヲ集メタル記録ヨリモ、遙カニ功效ヲ奏スル所ノ推究ノ一法アリ、今夫レ國ノ財貨ハ唯々貨錢、租稅、利益、及利子ノ四種ナリ、而ノ利子ハ利益ノ多少ヲ表スルモノナレハ、租稅、利子、共ニ崇高ナレハ、貨錢必ス低下ナラサルヘカラス、故ニ普通利子ノ厚薄ト、産額中租稅トシテ取上ケラル、所ノ分量ヲ確知スレハ、細密ニ貨錢ヲ考定スルヲ得ヘシ、貨錢ハ租稅、利益、及利子ノ剩餘ニシテ、即役夫ノ得ル所ノモノナレハナリ。

印度ニ於テハ古代ヨリ、利子、并ニ租稅ノ甚々崇高ナルハ、實ニ奇異ト云フヘシ、紀元前大凡九百年ニ編セラレ

タル、墨尼宇ノ憲法ニ於テ最モ低下ナル定法ノ利子ハ  
 百分ノ十五ニシテ、其最モ崇高ナルハ、百分ノ六十ナリ  
 是レ上代ノ古法ト雖モ今己ニ廢絶シタルモノト思考  
 スヘカ、ラス墨尼宇ノ憲法ハ、印度法學ノ基礎ナリ現ニ  
 千八百十年ニ於テ、金錢借用ノ利子百分ノ三十六ヨリ  
 六十ニ至リシトハ、確トシタル証據アリテ、余輩ノ能ク  
 知ル所ナリ、  
 右ハ、余カ現今推定スル所ノ原素ノ一ナリ、其他ノ原素  
 ハ、即チ租稅ナリ、是亦同シク細密ニシテ信用スヘキ証  
 據アリ、英倫及蘇格蘭ニ於テ、耕夫ノ地代トシテ拂フ所  
 ノ租稅ハ、產物ノ全額平均四分ノ一ナリ、佛蘭西ニ於テ

ハ平均凡ソ三分ノ一ナリ、又北亞米利加合衆國ニ於テ  
 ハ極少ニシテ往々租稅ノ名目アルニ過キサル所アリ  
 然レモ、印度ニ於テハ、定法ノ租稅即チ國ノ律法ト風習  
 トヲ以テ立タル、最モ低下ナル稅額、其產物ノ半ナリ、斯  
 ク苛酷ナル法度ト雖モ、印度人民ニ於テ猶ホ壓制トナ  
 スニ足ラサルナリ、何トナレハ、耕夫全產物ノ半額ヲ得  
 ルト能ハサルノミナラス、租稅往々騰貴シテ漸ク後次  
 播種ニ備フニ足ルヘキ剩餘ヲ保テ得サレハナリ、  
 是等ノ實事ヲ以テ之ヲ推究スルハ、明ニ其國ノ情勢ヲ  
 知ルニ足ルヘシ、固ヨリ利子ハ、利益ノ價格ニ隨テ變更  
 スルモノナレハ、租稅利子共ニ崇高ナレハ、貸錢ハ必ス

低下ナラサルハカラス印度ニ於テハ財貨ノ限額ハ租  
 税ノ利益及貨錢ノ四種ニ分ツヲ以テ租税ノ利益及利  
 益ノ三者ヲ増セハ剩餘ノ貨錢ハ必ス減少セサルヲ得  
 ス精細ニ之ヲ云ヘハ下等ノ者ノ受クル所ハ上等ノ者  
 ノ受クル所ヨリ甚ク些少ナレハナリ是レ必然ノ理ニ  
 シテ敢テ無用ノ辨論ヲ要セスト雖氏近古ノ實事ヲ以  
 テ之ヲ徵スルニ果シテ差ハサルナリ印度ニ於テハ古  
 代ヨリ貨錢甚ク低クシテ其人民辛クシテ生命ヲ繫ク  
 ハキ薄報ハ為ニ苛酷ハ勞動ヲ常トセリ  
 是レ印度ニ於テ食物ノ廉價ト豊饒ノニツヨリ生レ來  
 ル所ノ第一ノ弊害ナリ然レモ其弊害ハ獨リ此ニ止マ

貧困ハ卑屈  
 ヲ造成ス

ラス印度ニ於テモ其他各國ト同シク貧困ハ卑屈ヲ造  
 成シ富有ハ權勢ヲ引起ス今夫レ他事總テ同一ナル  
 所ハ愈々富シテ愈々權カヲ有スルハ一人一個ニ於ケ  
 ルモ各部各箇ニ於ケルモ更ニ差ハ所ナシ故ニ財貨ハ  
 分布平均ナラサレハ權カハ分布モ必ス平均ヲ得サル  
 ハ理ハ然ラシムル所ナリ而シテ權柄ヲ掌握シ之ヲ恣ニ  
 スルヲ欲セサルモハ又古今其例ヲ見サルナリ而シテ  
 印度人ハ氣候ハ為ニ貧困ハ天罰ニ處セラレ決シテ脱  
 出スヘカヲサル凌辱ニ陥タル所以ハ理ハ亦容易ニ了  
 解シ得ラルヘキナリ此理ハ前既ニ辨論ヲ盡シ殆ント  
 餘地ヲ殘サレハ今又喋々スルヲ用井ス唯二三ノ例

珍異預約

ヲ舉テ之ヲ説明スヘシ、  
 印度人民中殊獨羅斯ノ名ヲ帶ヒタル大ナル一團ノ民  
 アリ其國法中ニ此民ヲ管理スル珍異ノ預約アリ此輕  
 賤セラレタル人民若シ其長上ノ者ト坐席ヲ共ニスル  
 者アレハ其國ヲ追逐セラレ、或ハ慘毒賤惡ノ形罰ニ處  
 セラルル又其長上ニ向テ其言詞若シ失敬ニ涉レハ其口  
 ヲ燔カル又真ニ其長上ノ者ヲ輕侮スレハ其舌ヲ引キ  
 裂カル武羅湖僧官ニシテ法ヲ妨ヲ為ス者ハ死刑ニ  
 處セラル武羅明ト同種ニ坐スル者ハ唯タ生命ヲ守ラ  
 ル蓋シ四肢ヲ斷セ又心ヲ教育ニ傾ク苟モ聖經ニ耳ヲ  
 敬ツ者ハ其耳ニ熱油ヲ注キ入レラル若シ之ヲ記臆ス

ル時ハ死ニ處セララル武羅明ニ向テ罪ヲ犯セハ長上ニ  
 向テ罪ヲ犯シタルヨリ其ノ罰一層重大ナリ然リ而シ  
 テ自分殺害セラル、ヤ、犬猫或ハ鴉ノ害セラレタルト  
 殆ント同一ニシテ、更ニ其害者ノ罰科ヲ問ハサルナリ、  
 若シ其女ヲ武羅明ニ嫁ス片ハ現世ノ罪科之ヲ償フニ  
 足ラス故ニ其武羅明ハ懸隔ノ差アル賤女ヲ娶リ汚穢  
 ヲ受ケタルニヨリ地獄ニ墮落ストアリ又役夫ノ名ハ  
 卑賤ノ名稱トアリ是レ直ニ其固有ノ身位ヲ知ラシム  
 ル為メナリ然ルニ此賤稱ヲ冠スル如キハ尚未タ以テ  
 人間社會中ノ賤惡トシテ之ヲ壓服スルニ足ラストナ  
 シ、富ヲ累積スルヲ禁スル一法アリ又別ニ其主人之

ニ自由ヲ與フト雖氏事實ハ奴隸タルヲ免カレストノ  
款條アリ司法官之カ辭ヲ為シ是レ天ヨリ賦與セラレ  
タル地位ナレハ人カハ得テ能ク之ヲ脱却シ能ハ所ニ  
アラスト明言セリ

余想フニ是ノ如キ、奇異驚愕ニ堪ヘサル所ノ事ヲ行フ  
ヘキ權力ヲ有スルモノハ世界ニ於テ曾テ其比ヲ見サ  
ルヘシ、嗚呼印度ニ於テ永世卑屈ハ奴隸タルハ人民過  
半ハ命分ナリ而シテ其ノ原因ヲ繹ヌレハ、則抵抗スヘ  
カラサル所ノ造化ノ法ニ處セラレタルモノナリ、此法  
ノ權勢アル亦實ニ防禦シ得ヘカラサルモノニシテ何  
レノ國ヲ論ハス、此法ノ行ハル、地ハ力役ノ徒、常ニ其

壓抑ノ苦ヲ脱スル能ハサルナリ、熱帶諸國ニ於テ財貨  
ノ大ニ増殖セシ後其ノ民此ノ運命ヲ逃レタル一例ヲ  
見ス、又夕氣候ノ炎熱ハ、食物ノ豊饒ヲ生セサル一例ヲ  
見ス、又食物ノ豊饒ハ、先ツ財貨ノ不平均ヲ生シ、亞テ政  
權及民權ノ不平均ヲ生セサル一例ヲモ見サルナリ、凡  
ソ此情勢ハ國ニ於テハ下民ハ筭外ハ人ニシテ殆トト  
人ニ非ラサル如ク國事ニ喙ヲ容ルハ、權ナク且自分  
ハ勞動ヲ以テ作り出シタル財貨モ亦自カラ之ヲ處置  
スルハ權ヲ有セズ、下民ハ業ハカ役ニシテ其務ハ獨リ  
順從アルハ、故ニ此人民中ニ行ハルハ者ハ柔軟卑屈  
ハ行為ニシテ、此風俗乃チ其國質トナリタリ、故ニ其國

史ヲ檢スルニ其君主ニ背ケル民ナク貴賤ノ戦争ナク  
 一揆ヲ興ス民ナク又謀反ヲ企ツル民ナシ是等ハ國ニ  
 於テモ間々變革ナキニ非スト雖モ其變革ハ上ヨリ興  
 テ民間ヨリ起ルナシ獨リ能ク行ハルハ卑屈諂諛  
 ハ風ニシテ不羈獨立ノ精神全ク缺乏セリニ玉ハ戦  
 血統ハ争ヒ甚ク多ク政府ニ大改革アリ宮中ニ大改革  
 アリ君位ニ大改革アリ然レモ曾テ民間ニ大改革アラ  
 ス又一ツモ造化ノ交付セシ薄命ヲ輕減セシナク永  
 ク造化一例ノ法ヲ以テ拘束サハ更ニ他ノ別法行ハレ  
 ス故ニ他ノ成績モ生セサルナリ然ルニ開化ノ歐洲ニ  
 起ルヤ始メテ人ノ權義ニ差異アラサルノ光輝ヲ發シ

歐洲真開化

造化ノ別法

上下平均ノ端ヲ啟キ茲ニ於テ昔時ノ大病ナル財貨權  
 カノ不平均ヲ矯正セント欲スルノ勢ニ至レリ故ニ真  
 開化ハ各目ニ適合セシトハ悉皆歐洲ニ起リタリト云  
 ハレ何トナレハ昔時ノ大病ハ醫シ貴賤ノ權衡ヲ平  
 ニシ社會ハ人民ヲシテ悉ク政治ニ參與スルハ權ヲ與  
 ヘ全國人民ハ為ニ開進ハ門戸ヲ開キ以テ全國人民ハ  
 幸福ヲ固メント謀リシハ獨リ歐洲ニアレハナリ  
 歐洲ニ限リ造化ノ別法人ノ迷溺ヲ減シ智識ノ發達ヲ  
 誘導セシ所以ハ此篇ノ末尾ニ於テ之ヲ説明スヘシ然  
 レモ此論ハ余未タ辨論ヲ著ケサル新法ニ且ルヲ以テ  
 先ツ目前ノ議論ヲ完全スヘシ既ニ印度ニ就テ陳レタ



ル論條ハ、埃及墨西哥及白露ニ於テ同レク使用スヘキ  
ノ理ヲ説明セン是レ一舉シテ、亞細亞弗利加及亞米  
利加ノ最モ著明ナル開化ヲ歷論スルヲナレハ、異國隔  
地ニ就テ余カ前論ノ真偽ヲ見ルニ足ルヘク、又余カ狹  
小不全ハ材料ヨリ是等ハ、大法则ヲ生出セシ所ハ疑ヲ  
解キ併テ是等ハ、大法则ハ真正ナルトヲ証明シ得ラル  
ヘキナリ、

大法则

以上十三節、印度ヲ以テ例トシ、前論ヲ証ス、

亞弗利加諸邦ノ人民中獨リ埃及ノ之開化ノ域ニ進ミ  
タル所以ハ、前既ニ論述セシ如ク、身外ノ形情他諸邦ト  
相異ルヲ以テ容易ニ財貨ノ貯積ヲナシ、學藝ヲ習練ス

pho. g. tuo

ルノ徒ニ餘暇ヲ與ヘ、智識ヲ開拓スルノ便宜ヲ得サレ  
メタルニ由レリ、然ルニ其民此ノ如キ大利ヲ得、更ニ一  
ノ大事ヲ任達ケサリシ所以ハ、後ノ書頁ニ於テ辨明シ  
テ、其事情ヲ示スヘシ、但亞弗利加洲中、其他諸邦ノ人民  
ニ比スレハ、迥カニ高尚ノ地位ヲ占メシハ、亦賞セサル  
ヘカラサルナリ、

造化ノ法

埃及ノ開化ニ進ミタルハ、印度ノ開化ニ進ミタルト、同  
シク土地ノ肥潤ナルニ原キ來レリ、而シテ其氣候モ亦甚  
ク炎熱ナルヲ以テ、此二國ニ行ハル、所ノ造化ノ法亦  
自カラ同一ニシテ、功績亦隨テ同一ナリ、此二國ニ於テ  
ハ、食物豊ニシテ且廉ナリ、故ニ常ニ役夫夥多ニシテ貨

財ト權力ノ今布甚タ不平均ヲ生セリ此不平均ヨリシテ生スル所ノ弊害ハ此二國共ニ悉ク備ハラサルナシ此法ノ印度ニ行ハレタル模様ハ既ニ論辨ヲ費シタリ而ノ埃及往時ノ模様ヲ考究スルノ材料甚タ完全ナラスト雖氏此二國ノ開化其相類似スルト民間及政治上發達ノ順序ヲ支配スル其大道理ノ同一ナルトヲ証スルニ足ルヘキ材料ハ尚ホ多々ナリ

埃及往時ノ人民ヲ感動モシ形状ノ最モ要々ナル者ヲ探討スルニ其形状印度ト更ニ相異ナルトナシ第一其常食ニ就テ見ル片ハ亞細亞肥潤ノ地ニハ米アリ亞弗利加ニ於テハ之レニ代フルニ椰實アリ、ヂグリス河ヨ

リ大西洋ニ至ルマテ處トシテ椰樹ヲ産セサル地ナシ而ノ亞羅刺亞及赤道以北ノ亞弗利加全土ハ數百萬ノ人民波斯棗ヲ常食トセリ亞弗利加大沙漠中ノ過半ハ椰樹曾テ菓實ヲ結スト雖氏撒哈拉河ノ北ニ於テハ人民唯々其實ヲ食フノミナラス又之ヲ以テ家畜ヲ養フノ料トナセリ是レ其樹堅緻ノ質アルヲ以テ斯ク夥シキ菓實ヲ結ヘハナリ又埃及ニ於テハ椰樹自カラ生殖レテ其菓實饒多ナリ故ニ其土人之ヲ常食トシ且ツ古代ヨリ駱駝ヲ養フニモ亦之ヲ以テ牧料トナセリ此國ニ於テハ駱駝トシテ用フルモノハ獨リ駱駝ナリ是ヲ以テ亞弗利加ニ於テハ埃及ヲ最上ノ地トシ亞細

亞ニ於テハ、印度ヲ最上ノ地トス、而メ埃及ヲシテ開化  
 セシメタル者ハ、椰實ナリ、印度ヲシテ開化セシメタル  
 ハ、米ナリ、而米ノ有スル性能ハ、椰實モ亦之レヲ有セリ、  
 化學ヲ以テ之ヲ檢スルニ、印度ノ米ハ、粉質ヲ備ヘ、埃及  
 ノ椰實ハ又糖質ヲ備ヘ、其重要ノ滋養物ハ、共ニ同シク  
 之ヲ備具セリ、又氣候ニ就テ見ルトキハ、椰實ハ、米ト同  
 シク、熱地ニ生殖シテ、熱帶ノ地及其近傍ニ最モ繁殖セ  
 リ、此二物ノ増殖ト、其地ヲ占ムルトニ、就テ之ヲ見ルキ  
 ハ、其相類似スルヲ、極メテ近カク、椰實ハ米ト同シク之  
 ヲ生育スルノ勞ナクシテ、其果報ヲ生スルヲ甚タ夥シ  
 而メ其人數ヲ支養スルヲ多キニ比スレハ、其地ヲ占

ムルヲ甚タ小ナリ、一エーグルニ往々二百餘株ヲ植ル  
 一アリ、  
 天然ノ形狀同シケレハ、其國土相異ナルト雖、亦自カ  
 ラ相類似スルヲ、皆斯ノ如ク、夫レ著明ナリ、埃及ノ開化  
 ニ進ミタルハ、印度ト同シク、土地ノ肥潤ナルニ原ツケ  
 リ、是レ其地多産ニシテ、財貨ノ増殖ヲ速ニセシト、其食  
 物豊饒ニシテ財貨ノ分布ヲ齊整セシトニ由ルナリ、セ  
 イドハ、埃及中最モ肥潤ノ地ニシテ、其ゼヘス、カルナク  
 ラキシヲル、デンドラ、及エドホー、ノ遺物ノ如キハ美麗  
 壯觀ヲ極メ、實ニ智識ト熟練ハ、光輝灼々タル跡ヲ存セ  
 小又セイドニ於テハ、椰實及ヒ米ヨリ、尚ホ一層速カニ

増殖スル穀物ヲ食セリ、其食物ハ、即チ「ドホルラ」ニシテ、  
 此穀物ハ、近頃マテ上埃及ノミニ產生シ、且豊盛ニシテ、  
 其報ヲ耕夫ニ與フル、凡ソ二百四十倍ナリト云フ下  
 埃及ニ於テ以前ハ、「ドホルラ」ヲ產生セズ、然レモ、其ノ住  
 民「那以爾」ノ沃土ニ於テ、自然生殖スル蓮實ヲ以テ一種  
 ノ麵頭ヲ製シ、之レヲ以テ椰實ニ交ヘテ食トセリ、此物  
 亦甚タ廉價ノ食ニシテ、求メ易カリシナルヘシ、又此地  
 ニ夥多ノ植物野菜アリテ、多ク之ヲ食セリ、モハメタン  
 ノ信者攻撃ノ時ニ於テ、アレヒサントリア、ノ一府中ニ  
 穀物野菜ヲ賣テ、生活セレ人民四千ニ降ラサリシト云  
 フ、是ヲ以テ此地ノ住民、其食ニ富ミシ一ヲ知ルヘキナ

リ、  
 斯ノ如埃及ニハ、食物ノ豊饒ヨリシテ、印度ニ起リタル  
 功績ト著シク、同一ノ功績ヲ結成セリ、亞弗利加ニ於テ  
 ハ、一般ニ人口ノ繁殖、氣候ノ炎熱ニ由テ、獎勵セラレタ  
 リト雖モ、土地ノ瘠薄ニ由テ、又過絶セラレタリ、然レモ  
 「那以爾」ノ近傍ハ、此ノ阻碍ヲ生セズ、前既ニ記スル如キ  
 ノ法大ニ行ハレタリ、故ニ其功力ニ由テ、埃及人民ハ廉  
 價ノ食物ヲ得ルノミナラス、其食ヲ要スル、亦少量ナ  
 リ、是カ為メニ其人口繁殖ノ疆界ヲ廣セリ、又其費ヲ減  
 スル一原因ナルハ、氣候甚タ炎熱ナルヲ以テ、役夫ノ兒  
 童ノ如キハ、全ク衣服ヲ襲フ、ナシ、成人ト雖モ、輕便ナ

ル衣服ヲ以テ足レリトセリ、亦寒冷ナル國ニ於テ多費ノ衣服ヲ要スルモノト、全ク相背反セリ、偕テ今ヲ去ル一凡ソ千九百年以前、埃及ニ遊歴セシ、チヲドリエスシキリユスト云ヘル人ノ言ニ、稚兒ヨリ成人ニ至ルマテノ費用、二十<sup>ニ</sup>ドラクマス<sup>直</sup>シテ三圓二十錢ニ當ルニ過キスト云ヘリ、而ノ同氏ノ之ヲ此國人口ノ繁殖スル一原因ナリト云ヘルハ、亦真確ノ言ト稱スヘキナリ、左レハ前論ヲ單一ノ文ニ約スル<sup>ハ</sup>埃及ニ於テ速カニ人口ノ繁殖セシ所以ハ、土地肥潤ニシテ、生産ノ多カリシト、氣候極熱ニシテ、需要ヲ減セシトニ因ルト云フモ、敢テ抗論ナカルヘシ、埃及ハ亞弗利加洲中其他諸邦

ヨリ、人口遽カニ増殖セレノミナラス、恐クハ當時世界ニ在テ人口ノ繁殖ナル一埃及ニ超過セルモノアラサルヘシ、是ノマニテハ、余輩ノ論証實ニ狭少ニシテ、疑念ヲ解散スルニ完全ナラサルヘシト雖、亦確實ニシテ、疑ヲ解クニ足ルヘキ者アレハ、又決シテ争フヘカラサルナリ、ヘロドタスノ埃及記事ニアマジスノ在位ノ時ニハ、埃及ニ城邑ノ數二万アリシト、蓋シ此言浮大信ヲ容ル、ニ足ラストナスト雖、亦決シテ然ラサルモノアリ、ヘロドタスノ埃及遊歴ノ後四百年ニ埃及ニ遊歴シタル、チヲドリユスシキリユスト云ヘル人アリ、同氏ハヘロドタスノ名聲ヲ嫉ミ、同氏ノ記事ニ信ヲ置カサ

三三

185

ラシムル為メ、勉メテ異説ヲ用井タレ氏、此一點ニ就テハ、其言全ク相符合セリ、ガヲドリユス、シキリユスノ言ニ、當時ハ埃及ノ人口其他諸邦ト、差異ナケレ氏、昔時ハ一万八千余ノ邑城アリテ、全地球中、最モ人口稠密ノ國タリシト言ヘリ、

此二人ハ自己ノ實驗ニヨリ、能ク埃及ノ事情ニ通曉セレ者ナリ、今余殊ニ此二氏ノ言ヲ貴重スル所以ハ、其説ノ出ツル所全ク異ナルアルヲ以テナリ、ヘロドラスハ大概メンヒスニ在テ其事情ヲ檢察シ、ガヲドリユスハゼヘスニ在テ之ヲ檢察セリ、記申二氏ノ説、往々相對セサル處多クシテ、信用ヲ置キ難シト云フト雖氏、獨リ人

口ノ速カナル繁殖ト、其人民ノ卑屈ニ陥リタルトニ就テハ、二氏ノ説聊カ齟齬スル所ナシ、且又現今存在スル建築物ノ高大ナル形状ヲ見ルモ、之ヲ建築シタル其國勢ヲ推側スヘキナリ、此ノ如キ高大無用ノ建築ヲ興スニハ、人民必ス卑屈ニシテ隷從ニ安ンジ、治者必ス專擅ニシテ下民ヲ御スルニ苛刻ヲ極メタルヲ自カラ知ルヘキナリ、然ラサレハ是等ノ工事ハ決レテ為レ能ハサルモノナリ、縱令其富極大ナリト雖氏、其財ヲ用ウル極節ナリト雖氏、自主ノ民ヲ使役シテ、公平正當ノ報酬ヲ與フル所ハ、其經費洪大無量ニシテ、之ヲ支給スルヲ實ニ至難ナルヘシ、然レ氏埃及ハ、印度ト同シク、上下ノ懸

隔最モ甚タレク其間天地霄壤ノ差アツテ萬事上ヲ益  
 シ下ヲ虐スルヲ以テ常トセリ、故ニ是等ノ工業ハ、又其  
 顧慮スルニ足ラサル所ナルヘシ、若シ夫ノ職工ノ者、其  
 常業ヲ變シ或ハ政事ニ意ヲ注クアレハ、嚴科ヲ以テ  
 罰セラレ、君主、僧侶、及武士、ヲ除却レテ、誰一人、土地ヲ有  
 スルコトヲ許ルハ、實ニ壓抑モ亦タ過甚ト云フヘシ、下民  
 ハ殆ント馱獸ノ如ク下民ノ務ハ、獨リ苛酷ノ勞動ヲ為  
 シテ、報酬ヲ得ルコト能ハサルノ責任アルノミ、而シテ若シ  
 其勞役ニ怠惰ノ色ヲ表スハ、忽チ鞭朴ノ責ヲ免カレ  
 ス、又家僕ヲ責ムルニ屢々此刑ヲ以テセリ、又婦女ト雖  
 亦同一此刑ヲ免カレス、嗚呼其國ノ制度タルヤ、固ヨリ

專擅ナレハ、殘忍強暴ヲ用ウルハ、又何リ之ヲ怪シムニ  
 足ランヤ、是レ此等、如キ高大無量ノ建築ヲ造リシ所以  
 ナリ、然ルニ茲ニ思考ヲ費サス、徒ニ此等ノ建築物ヲ見  
 テ、遽カニ開化ノ徵候トセハ、豈皮相鑑者ノ譏ヲ免カル  
 ヘケンヤ、是レ其實ハ國勢衰弱麻靡ノ明証ナリ、夫レ工  
 藝技術ハ民ヲ利スヘキノ具ノリ、然ルニ斯ノ如キ工藝  
 技術ハ、其利ヲ得ヘキノ民ヲ害シ、却テ自己ノ勞動ヲ以  
 テ、自己ヲ責ムルノ器ヲ造リ出セン者ト云フヘキナリ、  
 是ノ如キ國ニ於テハ、人民ノ疾苦ヲ顧慮スル者ナキハ、  
 固ヨリ論スルニ足ラスト雖、下民ヲ苦役シテ之ニ報  
 酬ヲ與ヘス、其生命ヲ浪費シ、恬然トシテ更ニ之ヲ憫ム

モニユ

ノ色ナキヲ見ル片ハ、又心膽ヲシテ寒カラシムルニ堪  
 ヘタリ、其殘虐實ニ古今ニ比類ナキハ恰モ「モニユメン  
 卜石ノ古今ニ比類ナキカ如シ、又エレハンチンヨリセ  
 イスマテ一石ヲ運般スルニ、二千ノ人數ヲ三年ノ間使  
 用シ、紅海ノ一渠ヲ鑿ルニ、十二万ノ人命ヲ妄費シ、ヒラ  
 ミツト一基ヲ建造スルニ、二十年間三十六萬ノ人數  
 ヲ使役シクルヲ見ル片ハ、其人民ヲ役スルハ強暴殘毒  
 ハ狀又以テ信用ハ外ニ出テタリ、  
 以上八節ハ、埃及ヲ以テ例トス、

亞細亞弗利加ノ史乘ヲ看過シテ、今ヤ新世界ニ移リ  
 來レハ、倍前說ノ謬ヲサルヲ明ニスヘキ所ノ新証跡ヲ

發見スヘシ、歐人ノ渡來ニ先ツテ、亞米利加洲中稍々開  
 化シタルモノハ、墨西哥白露ノ兩地ト方今中央亞米利  
 加ト稱スル、墨西哥ノ南ヨリ、巴拿馬ノ地峽ニ達シテ、狹  
 長ノ地方アルノミ、當時此地方ニ住セシ人民ハ、其地質  
 ノ肥潤ナルカ為ニ、自カラ智識ノ幾分ヲ開拓セシト見  
 ヘタリ、其証ハ、則今世尚存スル所ノ器械及耕作ノ術ニ  
 熟練セシ遺物ヲ見ルニ決シテ、昏愚未開ノ野民ニハ企  
 テ及フヘカラサルモノアリ、其他此人民ノ事蹟ニ就テ  
 徵スヘキモノナシト雖、凡コパン、パレンキエ、及エキ  
 スマルノ如キ、建築物ハ、說話ヲ聞ケハ、又以テ中央亞米  
 利加、昔時ハ開化ハ、印度及埃及ハ開化ト同シク、財貨及



權カノ分布甚ク平均ナラサルハ故ヲ以テ人民ハ多クハ凌辱ニ苦シムト知ルヘキハミ

以上一節ハ中央亞米利加ヲ以テ例トス

却說中央亞米利加ノ昔時ノ形狀ヲ知ルニ足ルヘキ証

跡ハ殆ント亡失シテ見ルヘカラスト雖モ墨西哥及白

露ノ事蹟ニ於テ昔時ノ形狀ヲ探索シ其開化ノ性質ト

其開化ノ深淺トヲ考究シ得ヘキ材料ハ今尚多ク存在

セリ然ルニ之ヲ論述スル前ニ亞米利加洲中獨リ此二

國ノ住民ノミ儼然タル社會ヲ編制シ得タルニ其他諸

邦ハ悉ク皆猛惡無智ニシテ野蠻ノ俗ヲ脱シ得ザリシ

所以ヲ説明セハ却テ讀者ノ便益トナルヘシ今之ヲ吟

味セハ造化ノ權カ人間ノ運命ヲ支配セル其歴カハ強  
大ニシテ抵抗スヘカヲサルヲ深ク洞見スルニ至ル  
ヘシ

余輩ノ先ツ驚愕スル事件ハ亞米利加ニ於テモ亞細亞

亞弗利加ト同シク開化ノ起原ハ總テ熱地ニアリ白露

ハ則南方ノ熱帶ニ位シ中央亞米利加ト墨西哥ハ則北

方ノ熱帶ニ位セリ抑モ氣候炎熱ノ印度及埃及ノ國體

ニ感觸ヲ與ヘシ模様ハ既ニ探索ヲ悉シ其衣食ノ需要

ヲ減少シ財貨及權カノ分布ニ著シキ不平均ヲ生ゼシ

所以ヲ説明セリ然ルニ又別ニ氣候ノ溫度其國ノ開化

ヲ支配スルノ一法アリ但シ茲ニ至ルマテ之ヲ論述セ

開化ノ起原  
ハ熱地ニアリ

溫度ノ一法

サリレヤト疑フヘケレバ、之ヲ亞米利加ニ於テ説クハ、  
他ニ於テ説クヨリ一層ノ明瞭ヲ添フヘキヲ以テナリ、  
左テ新世界ニ於テハ、造化ノ權力、舊世界ヨリモ、強大ナ  
レハ、其歴カモ亦自カラ強大ナラサル可カラス故、其與  
ル所ノ感觸如何ヲ探討スルニハ、其權力ノ微弱ナル地  
ニ於テスルヨリ、遙カニ著明ニシテ、便利ナルモノアレ  
ハナリ、

食物豐饒ナレハ、開化ノ域ニ入ルト易ク、食物歉乏ナレ  
ハ、開化ノ途ニ出ルトノ難キハ、前既ニ其詳ヲ悉シタレ  
ハ、讀者必ス之ヲ胸間ニ保チ得ルヘシ、然ハ則、亞米利加  
ノ開化ハ、新世界ノ始メテ檢出セラレレバ、繁昌ノ地ニ

濕熱

植物分布

ノミ限レル所以ヲ曉リ得ルトモ亦タ容易ナルヘシ、何  
トナレハ、地質ノ善惡ヲ除ケハ、土地ノ肥潤ヲ整齊スル  
モノハ、濕熱ノニツナリ、是即チ造化ノ一法ナリ、然ルニ  
此法其實際ニ行ハル、ニ當テハ、時トシテ別法ノ攪ス  
所トナルナカラスト雖モ、他事大抵同一ナルキハ、決シ  
テ、此法ノ外ニ出サルナリ、且寒熱線ノ發明以來、輿地本  
草學ノ大ニ上進セルニ由リ、今ハ此法ノ一方タルト、植  
物窮理ノ論ニ就テ知ラルヘキノミナラス、植物諸國ノ  
分布ニ於テモ、其明徴ヲ探リ得ヘキナリ、  
亞米利加大洲ヲ通覽セハ、上ニ説ク所ノ法ト目下述ノ  
ル所ノ事件ト相結合スル所以ヲ了解スルニ至ルヘシ

潤濕

第一潤濕ニ就テ論スルニ亞米利加ニ於テ南北二洲トモ大河ハ悉皆東ノ海岸ニ在テ西ノ海岸ニ於テ曾テ一河ヲ見ス、今其原因未タ知ルヘカラスト雖氏是レ實ニ奇事ト云フヘレ、其東岸ニハ衆多ノ河アリ殊ニ尼刺羅拉巴拉佐、桑法蘭西士哥、亞馬生、阿利挪加、米西悉比、阿拉巴、麻、聖約翰、波多馬哥、薩斯給、合、摩拿、德拉瓦、勒、波、達、孫、聖老撈、佐ノ如キハ實ニ潤大ヲ極メタルモノト云フヘレ、此水脈ノ為ニ東岸ハ其地常ニ潤濕ヲ保テリ、但西岸ニ於テハ稍々河水ト稱スヘキモノハ北亞米利加ニ、獨リ阿勒哥摩アルノミ、南亞米利加ニハ、巴拿馬ノ地峽ヨリ馬日蘭ノ海峽ニ至ルマテ全ク一ノ河水ト稱号スヘ

溫熱

キモノアラタ然ルニ溫熱ニ就テ論スルニ北亞米利加ニ於テハ全ク之ト反對シテ熱ハ東岸ニ乏クシテ西岸ニ富メリ、蓋シ此溫度ノ差異ハ大氣ノ模様ニ由ルナルヘシ、何トナレハ凡ソ地球上北半球ハ其大陸ト島嶼トヨ論セス、東方ハ必ス西方ヨリ寒冷ナルモノナリ、然ルニ此事一般ニ係ハレル原因アルカ、又其地毎ニ特別ノ原因アルカ、今日未タ發明スルヲ能ハスト雖氏亦疑フ容ルヘカラストルノ實事ナリ、墨西哥以北ノ地ニ於テ一處トシテ濕熱ノ二者ヲ結合シタル地アラス、必ス一方ハ熱ヲ欠キ、一方ハ濕ヲ欠ケリ、是ヲ以テ財貨ハ増殖常ニ阻礙セラレ

一人事開進ハ途ニ出ル能ハス故ニ千五百年代歐洲ノ  
 學問亞米利加大地ニ輸入セシマテ二十度以北ニ住セ  
 シ人民ハ埃及印度ノ住民ノ容易ニ得タル所ノ不全ノ  
 開化ト雖モ之ヲ得ルヲ亦能ハサリシナリ之ニ反シテ  
 二十度以南ノ地ハ遠カニ其地形ヲ變シ急ニ收縮シテ  
 巴拿馬ノ地峽ニ至ルマテ狹仄ノ一帯トナリ而シテ一  
 小地墨西哥開化ノ中心タリ是等ノ理由ハ能ク前論ヲ  
 照會シテ自カラ其然ル所以ヲ知得スヘシ此地形ノ變  
 換ヲ以テ大ニ海岸ノ里程ヲ增長セリ是ヨリシテ北亞  
 米利加ノ南端ハ海島ノ體ヲ造セリ故海水ヨリ發スル  
 所ノ蒸氣ニ由テ潤濕ノ量ヲ増加セリ元來墨西哥ハ赤

墨西哥開化ノ中心

道ニ接近ナル為ニ熱ヲ得タリシニ今又此地形ノ為ニ  
 濕氣ヲ得ルニ及ヘリ北亞米利加洲中此ニツノ結合ヲ  
 得タル地ハ獨リ此墨西哥アルノミ故ニ稍々開化ハ域  
 ニ入タルモ亦獨リ此地アルハニ若シ嘉哩嶺<sup>嘉哩嶺</sup>及ヒ  
 南部哥倫波<sup>南部哥倫波</sup>陸ノ砂場ヲシテ東方ノ河水ニ由テ潤濕ヲ  
 得ヒシムルカ或ハ東方ノ河水西方ノ溫熱ヲ得テ結合  
 セシムルカ其地必ス昌盛ヲ極メ上代開化ノ先驅タリ  
 シト又疑ヲ容ルニ足ラサルナリ然ルニ二十度以北  
 ノ地ハ肥潤ノ二原因即チ濕熱ノ中必ス其一ヲ欠クヲ  
 以テ此線ヲ超テ南スルニアラサレハ開化其地ヲ占有  
 スヘキ處ヲ得ス故ニ此巨大ハ北亞米利加全洲中未ク

英國文明史 第三編 四十一

一國ハ能ク工藝技術ハ進步ヲ為シ確立永續ハ國ヲ成  
立シタル証ヲ見ス亦今後ト雖モ必ス其証ヲ見ルトナ  
カルベシ

昔時北亞米利加ノ造化ノ法制ニ支配セラレタル景况  
ハ是ノ如ク南亞米利加ハ其景况大ニ是ト異ニシテ東  
岸ハ西岸ヨリ寒ナリ是赤道以北ノ事ニシテ赤道以南  
ニ至テハ却テ東岸ハ西岸ヨリモ暖ナリ今此等ノ理ヲ  
前ニ詳記シタル所ノ亞米利加水脈ノ論ニ照シテ考フ  
ルキハ北亞米利加ニ缺乏シタル所ノ濕熱ノ二益ヲ占  
メタルト明白ナルヘシ南亞米利加ハ唯熱帶ニ位スル  
ノミナラス其東部ハ遼々巴拉西爾ノ南端及郁爾格埃

ノ區域ニ至ルマテ其肥潤ナルト北亞米利加洲中同緯

度ニ位スル地方ノ及フ所ニアラサルナリ

是故ニ前論ヲ輕々看過スルキハ南亞米利加ノ東部ハ

是ノ如ク造化ノ恩惠厚キヲ以テ此種ノ原因ヨリ生ス

ル所ノ開化ノ一二位スヘキニ似タレバ一層深ク之ヲ

探索スルキハ右ニ記載シタル所未タ以テ此地ノ形狀

ヲ悉クスニ足ラス又別ニ此ノ二原因ヲ消滅スル所ハ

第三ノ原因アリ此第三ノ原因其力ヲ逞フスルヲ以テ

新世界洲中最モ繁盛ノ民タルヘキ者ヲ阻攔シテ蠻野

ノ俗ヲ出ル能ハサラシメタリ

余カ暗指シタル所第三ノ原因トハ即チ貿易風ニシ

第三ノ原因

貿易風

テ此奇異ハ現象ハ歐洲昔時ハ開化ニ大妨害ヲ與ヘタルモハナリ抑モ貿易風ハ赤道北二十八度ヨリ赤道ノ南二十八度此間五十六度ニ下ラサル地球上最モ肥潤ノ地ニ帶ヲ貫テ終歲東北或ハ東南ヨリ吹下ス此方位ニ限キリ斯ク風道一定ノ規則アル所以ハ方今既ニ解レ得ル所ニレテ一ハ赤道ニ於テ大氣ノ交換スルニ由リ一ハ地球ノ運動ニ由レリ何トナレハ北半球ニハ北風アリ南半球ニハ南風アリ各兩極ヨリ寒冷ノ空氣ヲ赤道ニ向テ吹下シ地球ノ自轉西ヨリ東スルニ值テ忽チ其ノ方位ヲ變スルナリ原來地球ノ運轉ハ赤道接近ノ地ニ於テ其速カ最モ迅速ナルヲ以テ兩極ヨリ來ル

原書ニ  
作ルルハ  
誤謬

所ノ大氣ノ流動ニ打チ勝チ新ニ之ニ其方向ヲ決シテ西流セシムルナリ然ルニ是レ貿易風ノ講説ニシテ現今ノ要務ニアラサレバ更ニ此大現象ハ南亞米利加ハ事蹟ニ感觸ヲ與フル緣由ヲ辨明スヘシ  
貿易風ハ東方ヨリ大西洋ヲ横截シテ南亞米利加ノ東岸ニ向テ吹來ルヲ以テ其際多ク大西洋ノ水蒸氣ヲ携帶セリ故ニ此蒸氣海岸ニ達スルノ後時アツテ雨ト為リ西方ニ進マントスルノ間安納斯山ノ大脈ノ為メニ妨礙セラレ之レヲ踰越スルヲ能ハス是ニ於テ此雨悉ク巴拉西爾地方ニ瀉下ス故ニ巴拉西爾ハ屢々危險ノ洪水ニ遭遇スルヲアリ斯ク水分ノ豐感ナルニ猶亞米

巴拉西爾ノ  
豐盛宇内其  
右ニ出ルモ  
ノナシ

利加東部ノ水脈ヲ如ヘ又之ニ温熱ヲ重ヌルヲ以テ巴  
拉西爾ノ肥潤ニシテ物産ノ豊饒ナルヲ宇内其右ニ出  
ルモノナシ。諸テ巴拉西爾ハ其幅員殆ント全歐洲ト比  
敵シテ植物ノ繁盛ナルヲ又想像ノ外ニアリ。峯巒鬱葱  
雲霧變幻ハ景光ハ造化其手腕ニ信セ彩筆ヲ揮テ奇功  
ハ畫圖ヲ寫出スニ似タリ而シテ此極大ナル地方ハ八九  
ハ紫翠重疊草木森映其大幹巨材ハ五彩花ヲ著ケ四時  
芬ヲ翻シ其美天壤ノ間軒比スヘキモハヲ見ス其產物  
ハ夥多ナル亦推テ知ル可キナリ其梢上ニハ羽毛鮮美  
ニシテ光彩人ヲ照スハ鳴禽其棲ヲ占ム其鸞々天ニ參  
スル所ハ枝ニ巢カヒ其下ハ灌木蔓草縱横自在ニ長舒

シテ欣々榮ルニ向ヒ又百千種類ハ無血蟲アリ又容貌  
怪奇ハ肥蟲アリ又爛斑輝々踊躍淵ヲ出テ樹ヲ攀スル  
ハ蟒蛇アリ匍匐崖ニ上ルハ蜘蛛アリ是等ノ動物此造  
化ノ大工場ニ於テ食ヲ得生ヲ營ムヲ得タリ猶ホ百事  
具備シテ一箇ノ缺乏ナカラシメン為メニ此極大ノ森  
林ヲ環リテ廣潤ナル原野アリ其原草ハ濕熱ノニツニ  
飽テ其氣色生々タリ其群ヲ為ス猛獸ハ其葉ヲ啖ヒ又  
其周圍ニハ吞噬搏鬪ヲ恣ニスル兇惡ナル動物ノ巢窟  
アリ其景狀ハ實ニ吾人ヲシテ人間ハカヲ以テ容易ニ  
殲滅スヘカヲサルハ思想ヲ抱カシム

造化横恣

巴拉西爾ハ斯ノ如ク生物填满ノ地ニシテ造化横恣更

二。人間ノ為ニ寸地ヲ剝サルヲ以テ其人民ハ此雄壯宏  
 大ナル威勢ニ壓迫セラレ却テ憤發勇進ノ氣象ヲ亡失  
 セリ。故ニ巴拉西爾全國ハ古代ヨリ不文不開ノ國土ヲ  
 免カレス。住民ハ常ニ水草移轉ノ生計ヲ事トシ總テ草  
 昧幼兒ノ人民ノ如ク敢為ノ性ナク事業ヲ企ツルコトヲ  
 嫌ヒ工藝技術ニ通セサルヲ以テ天然ノ障碍ヲ排撃ス  
 ルコト能ハス。近古三百餘年ノ間歐人ノ智術ニ由テ漸ク  
 沿海ノ地ハ開明ノ光輝ヲ顯スト雖凡其光輝深ク内部  
 ニ透入スルコト能ハス故ニ内部ハ依然トシテ蠻野ノ舊  
 ニ異ナラス其住民ハ今尚ホ無智強暴ニシテ憲法ヲ設  
 ケテ之ニ從フコト能ハス又自カラ檢束其身ヲ保ツコトヲ

知ラス舊染古慣ニ因襲シテ殘忍猛惡ノ所為ニ安ニセ  
 以畢竟巴拉西爾地方ハ造化ノ權カ旺盛ニ過ルヲ以テ  
 開拓ヲ為サント欲スレハ芟夷スヘカヲサルハ深林ハ  
 少種藝ヲ為サント欲スレハ殲滅スヘカヲサル無數ノ  
 害蟲アリ山ハ高峻ニ過キテ攀躋ニ便ナラス河ハ廣濶  
 ニ過キテ橋梁ヲ架スルヲ許サズ百物皆人心ヲ壓倒シ  
 テ其企望ヲ斷絶セシムルハ斯ク造化其權カラ恣ニス  
 ルヲ以テ人間ノ精神之カ為ニ挫折セラレ開智ノ途程  
 ニ發軔スルコト能ハサルノミナラス外國ノ援助ヲ得ル  
 ニアラサレハ恐クハ現今不完ノ開化モ為サルヘシ  
 何トナレハ今日ニ於テモ歐洲ヨリ絶エス開化ノ事業



ヲ移植スト雖氏未タ以テ真成開化ノ兆頭ヲ見ルナク  
 僅カニ五十分ノ一二足ラサル地ヲ開化スルニ過キサ  
 レハナリ然ルニ今日巴拉西爾ノ實際ニ就テ見ル片ハ  
 其國土ハ佛國十二倍ニ超ルノ大地ニシテ植物動物ハ  
 斯ノ如ク夥多ニシテ土地ハ斯ノ如ク廣大ナリ内部ハ  
 至良ハ河水ニ灌溉セラレ外部ハ至善ハ港隴ヲ以テ縫  
 飾セラレ而シテ其人口ハ六百萬ハ僅カニ過キサルハ豈  
 ニ奇怪ハ至リト云ハサルヘカヘヤ  
 是等ヲ以テ之ヲ觀ル片ハ巴拉西爾全國ニ於テ何ヲ以  
 テ最モ不全ノ開化ト雖其徵候ヲ顯サ、ルヤ又何ヲ以  
 テ其人民ハ此國ノ始メテ檢出セラレシ片ハ蠻野ノ形

狀ヲ脱シ得サリシヤヲ明瞭ニ解シ得ラルヘシ然ルニ  
 茲ニ巴拉西爾ト其背ヲ合セ、同洲ニ在テ同緯度ニ位ス  
 ト雖氏造化ノ形象其趣ヲ異ニスルニ由リ人事ニ於テ  
 モ亦自カラ相異ナル所ノ一國アリ、即チ有名ナル白露  
 國ニシテ其境土ハ廣ク南熱帶中ニ蔓延シ獨リ南亞米  
 利加洲中ニ於テ開化ハ域ニ近シク所ハ地位ニ至リ得  
 タルモハナリ巴拉西爾ハ氣候ノ炎熱ニ、彼ノ東岸巨大  
 ノ水脈ト貿易風ノ攜帶セル所ノ多量ノ濕氣ヲ結合ス  
 ルヲ以テ宇内無比ノ豐盛ヲ極ムト雖氏造化其恩惠ノ  
 度ヲ過スヲ以テ土人ノ智力此恩惠ヲ我利用ニ供スル  
 能ハサルノミナラス、却テ開進ノ妨害ト成ルニ及ヘリ

造化勢力如何

幸福之湊合

若シ巴拉西爾ヲシテ造化ノ恩惠斯ク盛大ナラス、其威  
 力制御シ易カラシメハ、亞細亞、及亞弗利加ニ於テ記載  
 セシ如キ同一形狀ノ開化ヲ發見スルニ至ルヘシ、  
 是故ニ當初開化ノ品位ヲ定メシ造化ノ勢力ヲ論究ス  
 ルニ際シテ、只其ノ勢力ノ強大如何ヲ以テ之ヲ決ス可  
 カラス、宜ク又其勢力ノ制御スヘキヤ否ヤヲ商量セサ  
 ルヘカラス、即チ之ヲ收メテ我用ニ供スル難易如何ヲ  
 合セ考ルナリ、今此法ヲ以テ墨西哥及白露ノ二國ヲ律  
 スルニ、亞米利加諸邦ノ中此二國ハ此幸福湊合最モ其  
 宜ヲ得タル地方ニシテ、其國ノ豊饒遠ク巴拉西爾ニ及  
 ハズト雖モ、之ヲ制御スルハ、太夕易久且氣候ノ炎熱ナ

人事規則

ルヲ以テ、前段論述スル如キ、當初草昧ノ開化ヲ誘導ス  
 ル所ノ侷法皆行ハレタリ、而ノ其國緯度ノ如キモ現今  
 白露ノ南界ト、昔時墨西哥ノ北界ト相同シク、墨西哥ノ  
 境ハ北緯二十一度ニアリ白露ノ境ハ南緯二十一度半  
 ニアリ、共ニ熱帶線中ヲ出テサルハ、豈奇合ト云ハサル  
 ヘケンヤ、  
 能ク、歴史ヲ吟味スルハ、人事ノ整齊トノ規則アルヲ、  
 是ノ如ク一定ナルニ驚愕スヘシ、墨西哥及白露ヲ以テ  
 既ニ記載セル舊世界諸邦ト、相照準スルニ、亦總テ歐洲  
 ノ開化ニ先ツタル諸洲ノ開化ニ於ケル如ク、其社會ニ  
 發起スル事全ク造化ノ法制ニ支配セラレタリ、第一其

食物ノ性質ヲ見ルニ、亞細亞及亞弗利加ノ極メテ豊饒ナル地方ニ於テ、看出セルモノト全ク相異ナラス、原來新世界ニ於テハ、舊世界ノ如ク、多クノ支養力ヲ備フル植物ヲ見スト、雖、又米及ヒ椰實ニ代フルモノアリ、而ノ其生育ノ容易ナルト又收穫ノ多キモ亦之ト更ニ異ナルヲナシ、故ニ隨テ人事ニ感觸ヲ與フルヲモ亦同一ニシテ其成果ヲ共ニセリ、墨西哥及白露ニ於テ、最モ緊要ナル食物ハ、玉蜀黍ナリ、此玉蜀黍ハ元ト亞米利加大洲ノ産ナルヲ疑ヲ容レサルナリ、此物米及ヒ椰實ト同シク、唯々氣候炎熱ノ地ノミニ産シ、而シテ水面ヨリ七千忽一忽ハ一尺餘ニ當ル、高地ニ於テ生育スルト雖、凡四十度以

玉蜀黍

民間政治

外ノ地ニハ、多ク之ヲ生セス、其繁殖ノ力、熱度ノ低下スルニ隨ヒ、俄ニ減少スルニ至ル、故ニ新加里福尼ニ於テハ、平均其收穫纔ニ七八十倍ナリト雖、墨西哥本部ニ於テハ、同一ノ量ヲ種ユル片ハ、通例三四百倍ニ至リ、其豊熟スル片ハ、八百倍ノ報ヲ獲ルニ至レリ、此ノ如ク、増殖豊饒ナル産物ヲ食トシテ、生活スル人民ハ、勤勉勞苦ヲ要セズ、其人口容易ニ増息スルヲ以テ、民間及政治上ノ事績皆印度埃及ト同一ノ結果ヲ成セシ、ハ、亦自然ノ勢ナリ、玉蜀黍ノ外、又別ニ一種ノ食物アリ、即チ愛倫ニ於テ、人口ノ繁殖ヲ速ニシ、大ニ開化ノ妨害ヲ惹キ起セシ、所ノ馬鈴薯ナリ、此物原來白露ノ産物ナ

芭蕉實

リト云説アリ、又有名ナル一家此説ヲ非トセリ然レモ  
 歐人ノ始メテ此地ヲ檢出セシ時、此地ニ於テ、此物ノ最  
 モ夥多ナリシトハ亦吾人ノ確信スル所ナリ、墨西哥ニ  
 於テハ、西班牙人ノ始メテ、渡来セシ迄ハ、其地曾テ馬鈴  
 薯ナシ、然ルニ、墨西哥白露ハ、多ク芭蕉實ヲ産シ、人民皆  
 之ヲ食トセリ、而シテ其收獲ハ精密確實ノ記録アルヲ以  
 テ、僅ニ讀者ヲシテ、其盛大ヲ信用セシムル程ノ多キナ  
 得ルト云フ、亞米利加ニ於テ、此奇物密ニ其氣候ニ隨フ  
 ヲ以テ、温度某ノ点ヲ超ルトキハ、其民一日之ヲ欠クヘ  
 カラス、而シテ其支養力ノ多キ、歐洲ニ於テ、小麥ヲ種レハ、  
 一埃加ヲ以テ、僅ニ二人ヲ養フニ過キスト、雖モ芭蕉ヲ

栽レハ、以テ五十人以上ヲ支給スヘシ、故ニ芭蕉ノ收獲  
 ハ、馬鈴薯ノ四十四倍ニシテ、小麥ニ百三十倍スルノ理  
 ナリ  
 故ニ墨西哥及白露ノ開化ハ、總テ其大要ニ於テ、印度及  
 埃及ト極メテ、相似タル所以ヲ、容易ニ了解シ得ラルヘ  
 シ、左テ、此四國及南方亞細亞、中央亞米利加ニ於テ、其他  
 一二ノ地方ハ、纔カニ開化ノ區域ニ進入スト、雖モ、歐州  
 隆盛ノ文運ニ比スレハ、實ニ憫ヘキノ形情ナリ、然ルニ  
 之ヲ此ト其時代ヲ同フシ、其境界ヲ接シテ、更ニ文化ノ  
 途上ニ發軔スルヲ得サリシ、矇昧地方ノ蠻族ニ比ス  
 レハ、亦霄壤ノ差アリト云フヘシ、但是等ノ諸國、其不全